大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和六年六月一日發行（毎月一回一日發行）

主幹・麻生路郎

川柳雜誌

六月號

第八卷第六號

川柳雜誌社發行

六月例會

▼日時　六月七日午後六時半(日)
▼場所　南區清水町電停西入北側　端の坊
▼兼題　「減俸」　三句
▼會費　二十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。
柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第八卷第六號目次

文苑

不朽洞より　麻生路郎(二)
柳の絮(三)　長野吉高(八)
湖の微風　松丘町二(二〇)
書名讀込の古川柳　竹馬居主人(二九)
撫柳談　阿部閑生(三四)
川柳修業記　句箋子(四二)
月評作家展望　紋太、ひろし、琴人(二三)　素人、山雨樓、亂耽町二

地下鐵
海士　加納山茶花(一二)
藪じらみ(B)　尾崎海洋人(一四)
酒を甜めつゝ十三　絃堂主人(一五)
プペダンスと玉木座　三輪五輪(一六)
二つの點景　中西おさむ(一八)
初心者　岩垣奇可愛(一九)
この女房あの女房　山本丹路(三二)
埋草　岩本素人(三三)

一路集(募集句)

笛　竹内多聞(三六)
梯子　松盛琴人(三九)
森　伊藤綠之助　友淵貴山(四〇)
本社五月例會　松丘町二記(四六)
續川柳家戸籍調　福田山雨樓(三六)
杭全町MEMO　橋本綠雨(三九)

創作

近作　麻生路郎(一)
川柳塔……(四)
○
一徹　山雨樓　愚陀　新水
素人　琴人　雅幽　鮎美
町二　柳路　綠雨
◇
裸人　閑生　春秋　濁水
丹路　鶴峰　靈靈　翠夢
艸樂　一流　夢裡　觀月
豆秋　多郎　晃卓　計加
夏曉　華水　綠之助　桂枝
雪峰　明珠　光路　櫻果

近作柳樽　麻生路郎選(一二)
同　安井ひろし選(二六)
光耀抄　麻生葭乃選(三二)
各地柳壇……(四六)
表紙

近作

麻生路郎

大濱の丸萬別館にて（二句）

三人が醉へば三人らしくなり

春すぎて夏は來たけど片思ひ

綠之助君の結婚を祝して

だあまつて肩をならべた二人きり

新世界萬よしの主人に

みんな醉はしてこころよく寢る

絹夜具の中で減俸案生れ

くびの隣の減俸を知り

旅の主幹（一）

向つて右から月ケ瀬の寮を訪れた路郎先生金井總士等の一行（四月一九日撮影）

不朽洞より

路郎生

大火を懐ふ

▼山中に大火があつた。次いで松江に大火があつた。共に曾遊の地だけに心がくらくなるのを覺えた。山中の桂屋の別館も燒けたらしい。綠雨君が未だ二柳子と云つたころ、二人で出かけて、あの宿で寢ころんで旅信をしたためてゐた。恰度その時思ひがけない鐘の音を、すぐ背後の山の中から聞いた。その時に、ふつと浮んだ句が

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

といふ句であつた。それをすぐさま繪葉書にかきつけた。それを大阪日日の上總天香さんが紙上の春風樓漫筆でほめてくれたことが想ひ出される。その天香さんも亡くなられた。私の句が生れた旅の宿も燒けてしまつたそしてその時に鳴つた鐘のある藥王寺も燒けてしまつた。ただ私だけが生き殘つてゐるのを不思議だと云はないばかりに。

その後、紋太、萬よし、綠雨の三君と再び山中の土を踏んだがその時の宿の吉野屋の第二別館は新聞では燒け殘つてゐるやうに思へるが、地理に悉しい綠雨君の話では燒けたらしい。

▼松江では大橋を渡つたすぐ横の嫁ケ島の見える、なには屋旅館に泊つたが、こゝも火元のすぐそばだから、おそらく助かつてはゐまい。あの宿には劍花坊氏や三太郎氏の短冊もあつたがどうなつたか。次から次へと壞はれゆく世のありさまを如實に見せられたやうな氣がした。

「第一線」新設

▼五月十日の夜、事務所樓上で社友同人懇談の夕を開き　同時

旅の主幹（二）

向つて右から楽所線、アート君、リリ線、晋乃夫人、一歩君、路郎先生
（四月廿九日玉手山にて末永氏撮影）

に社務に關する諸種の改革案を審議した。改革案中左記の如きは作家各自にこつて重大な關係を持つものであるから私から報告することにした。

▼從來「近作柳樽」欄は第一部第二部に分ち、僕が第一部の方を擔當し、ひろし君が第二部を受持つて來たが、本號募集の分から同欄を一つに纏め之れをひろし、町二の兩君が隔月交代で選句することに更めた。

そして別に「第一線」なる句陣的牙城を設け過去一ケ年間に「近作柳樽」欄で力作を見せられた作家中より左記卅名を選拔推薦し、それ等の人々の作品と本社同人社友の作品とを合して僕が選句することにした。

浪人街（神戸）　日日城（大阪）
露斗（廣島）　勝二（大和）
如空（朝鮮）　志郎（神戸）
翠峯（大和）　虛白（尼崎）
民郎（松本）　夕鐘（大阪）
柳兒（長野）　光哉（奥）
旭虹（金澤）　曉風（大阪）
水郎（宮津）　聽松（鳥取）
可村（神戸）　沒食子（大阪）
佐保蘭（東京）　進一郎（大阪）
卯生（神戸）　木偶人（金澤）
不然（神戸）　素萠（大阪）
方眠（姫島）　卯三（大阪）
大夢子（大阪）　湖山（釜池）
丁路（京都）　耕民（鳥取）

▼「第一線」欄に選拔した作家は毎年新年號及八月特輯號誌上で更新するつもりだが、同欄には前記のやうに本社同人社友も選拔作家と同一句數十句以內を寄せるのであるから互ひに鎬を削つて句の向上に勵むこと丶なり率ひては柳壇に清新の氣を注ぎ一段の好影響を與えるであらうことを期待してゐる。又之れに伴つて僕が選句する人の範圍が狹くなり多忙に追はれてゐた時間にも幾分餘裕を生じるから氣の付いた點は折にふれて書いて見たいと思つてゐる。

▼「川柳塔」の選句は從來一切僕がやつて來たのであるが「第一線」投句數以外の句は編輯局（當分の間は綠雨、素人、琴人、山雨樓四人の合議選で）選をすることゝした。同人社友の諸君は第一線と共に川柳塔へも奮つて佳吟を寄せられたい。

川柳塔

○　長谷川一徹

春晩く衣冠束帶なご母校
わかるかご云へばうなづき涙ぐむ
モロッコが觀たさ大橋座を尋ね
春雨をうれしく思ひ湯をはじく
人の子の疚しからずご云ひ得んや
櫻狩地下鐵臭いものご知る
醉うて泣く父の姿にまがひなし
快くなりし子を連れて行く晩櫻

○　福田山雨樓

亂耽氏へ

ふたアりに海ご山ごのエメラルド
子を叱るほご働きのあるでなし
農夫が兩手で放尿しちよる
るつぼ今寢呆けた色に消えかゝり

游魚を悼む

名優のおもかげありし輕い咳

伊藤愚陀

春の起重機が空指して

○　朝田新水

合理化に家族本位ご知る妾
脚色の苦心足袋から指の見ゆ
無慈悲なる科學に職を奪はれし
出世までごんでもないご子の學資
新綠へ理性はすでによみがへり
貞婦にも欠伸する日のあるならん

○　岩本素人

因習の戀ならなくに十五年
疲れてる上で吊皮ゆれるこご
熱心に利害を解いてくれたこて

○　松盛琴人

發明を覗けば暗い處に居る

せきれいに河原の石が生きてゐる

ほつねんと居れば金魚が泡をふき

足るたらぬ物の不平へ目を閉り

すきのない顔して智恵者らしくゐる

勞働を賣らぬ日こいふメーデーの埃

表彰式へ參列して（四月十五日）

表彰式櫻の花も眞盛り

○　關本雅幽

ボロ口へ小さくなつて自分も居

一時逃れの世がまごろしくなつて來た

○　水谷鮎美

落第坊主〳〵陽が暮れる

雨傘を持つ洋服に主義もなし

川村觀月君男兒出生

にぎやかな膳につかんこ父おもひ

○　松丘町二

夕べ疲れた屋根がごちや〳〵こある

春は逝く褄皮の泥拭ふこき

○　岩崎柳路

結局は專門醫へこ家庭闌

緊縮も知らず巍然こビルジング

○　橋本綠雨

うたがへば僧の心もにくらしい

延びて行く樹に失職氣がふさぎ

保津川下り

岩一つさへ船頭は見逃さず

◇　中野裸人

首吊つて死ぬ空想へ父が呼び

惡口を云いにわざ〳〵汽車で來る

腹たてゝ嫁に算盤おかして居

料理屋からもごり家出のあこを追ひ

丸顏で桃割れだつた保護願

モガは子を荷物のやうに抱いて行き

◇　阿部閑生

神樣に合はさぬ手にて犬を抱く

殺すほご可愛がれよこは云はじ

繃帶の右手を吊つて君何處へ

叢を子が這ひまはり啼く雲雀

花間より君の病床少し見ゆ

◇　喜多春秋

くせものゝ技巧にすぎたなこ思ひ

自首する氣はつきり帶をしめ直し
風の夜は電車の通る音で更け
こつぽりのしんごかつたこ休むなり

◇ 中澤濁水

久振り一先づ女給つんこ見せ
やつこ取る釣錢が轉がる發車前
雜談を滅茶々々にして產氣づき
まだ馴れぬ仲居奇遇へ所在なさ

◇ 山本丹路

素人らしくするのが精一杯の媚で
ワイシャツの着換が今日も出來てこず
君たちの五月一日僕は酒

◇ 福田鶴峰

肺だこは醫者が云はないだけの事
同じ舟仕事するのこ遊ぶのこ

京詣り

拜みつゝこゝが西かい東かい

◇ 片桐靈壺

魂に五センチ程の穴があき
それだからだからこ紙幣の皺を伸し

◇ 生田翠夢

丸髷に結はして見たが藝妓なり
青空に錢をかぞへる音がする

◇ 西田艸樂

美しさ見惚れる丈けで罪だろか
いたづら兒お前の肉が熟れて來た

◇ 硫一流

病床で利殖の法もかんがへる

亡妹Sちやんへ

兄さんはこのごろ唱はなくなつた

◇ 村松夢裡

不服から人の秘密をきかされる
憂鬱が牡丹畑に一人居る

◇ 川村觀月

角兵衛獅子の笛をかすかに見送れり

◇ 須崎豆秋

寢轉べこ地圖に櫻は咲いてなし

◇ 松田多郎

握つて見ればシュークリームだつた彼女

◇ 木村晃卓

肺だからよるなこ言へば涙ぐみ

貧乏で弱くちやねえこと斗りなり

◇　三好計加

花咲いてお寺儲ける準備中

春の惱みの髪梳くポーズ

◇　三輪夏曉

うばはれた戀に費へし幾月よ

手不足に能率までもうたがはれ

◇　日野華水

鏃詰の蓋を書齋へたのみに來

新しく質屋の廣告はられて居

◇　伊藤綠乙助

春の雨誰も笑はず別れたり

ジヤズの中なる革命の足拍子

◇　岡崎桂枝

雜役の頭をはつて株に敗け

柳友平田木蛙氏の祝新婚

春淺く襖に嬉し影こ影

◇　池田雪峰

春セルの柄に戀した面白さ

戰死した形で春の野にころび

煙突は黑し社長の氣の如く

◇　西村明珠

青い目の人形を持つ子をかこみ

廣告の通りに行けば治る頃

子の枕いつこはなしに小さ過ぎ

辻褄を合はす減俸こはかなし

◇　中見光路

搦草に去年の溝が飛べてゐる

全くさこは遣りきれぬ人ごうし

思索する紫煙默する灯に迫り

貧相にさせる鰹のみ深まりて

◇　藤岡櫻果

百姓家汽車から氣樂さうに見え

三笠山蜜柑ころ〳〵〳〵こ春

丹西波多紀アルプス縱走(二句)

家柄は誇るが如く鯉幟

れんげ握つて汽車に見惚れる

鄕人沒落

寄食こも知らずいのうこせがむなり

柳の絮

長野吉高

（三）

オスカア、ワイルドは、韻文悲劇に大きな野心と抱負を持つてゐたに拘らず、事實は之れに反してドイツでは「サロメ」の作者として、イギリスでは詩人として、フランスでは批評家として知られた。人生とは、舌で上唇を舐る様に、さう易々と簡單には出來てゐない、的を射損じるのは必ずしも下手な弓の射手のみとは限らない。大丈夫と思ふ女に、ぞかアンと肱突を喰ふ男もある。まゝならぬと凡俗はこゝらで悟る。

雨軒居士等は、さしあたり此の組かも知れない。眞面目に自然科學者にならうと思つたり、母親が熱心な佛教徒だつたので宗教思想を多分に吹込まれた結果、宗教家にならうとしたり、純正哲學をやらうか等も考へたり、其れで大學は終にドイツ文學を專攻してゐるのだから面白い。彼に言はすと、科學も宗教も其して哲學も、皆んな欠伸ものだつたと言ふ。然らば最後に彼が摑んだ文學は？

ゲーテ糞喰への意氣で、原稿紙だけは人並にせつせと書き潰してゐた雨軒居士、意氣甚だ愛すべきだつたが、ざうも彼の書くものは餘りパッとしない。或雜誌で、さる先輩から糞味噌にこき落されたので憤然として起つた彼、この野郎奴とばかり物凄く一騎打を始めた。筆の先で理窟を言はすと雨軒居士なかなか味な所がある。彼の書く小説とは豚の兒と雀の子程の相違は確かにある。明快な理論闘爭で、先輩を美事に土俵の砂に叩きつけ、勝圍扇だけは雨軒居士に上つたが、此れでも未だ腹の虫が承知しなかつたと見えて、小説なんかこちらから書いてやらないぞとばかり到々旋毛を曲げてしまつた。だが、其のまゝでは退かない。今度は反對に、他人樣の書く小説を手當り次第、辛辣に漫罵し始めた。これが所謂「評論家雨軒居士」又の名「村正雨軒」と言はれる所以だ。全く彼が論陣を布くと、惡劍村正の如く相手を斬つて血を見ないと承知しないのだから厄介千萬だ。敬遠の意味で大學の教授に引張り出されたが、多少悟る所があつたと見え、大學の教授なんて御用學者はマッ平だとばかり、一年程で引退してしまつた。村正は引扳かなくなつたが

爾來完全に世にすねてしまつてゐる。

ワイルドの様に、雨軒居士が韻文悲劇に野心を抱負を持つてゐたか怎うかは知らぬが、要するに大文豪にならうとしてゐた事だけは間違ひない。A點とB點とを結ぶ直線をうつかり踏違へて、C點に迷ひ込んだ爲めに、文壇方面では「村正」で知られ、學界では「ドイツ現代文藝を中心としての溯源的研究史論」の長つたらしい標題の著者として知られてゐるに過ぎない。詩人とは言はれ、批評家とは言はれて若しワイルドが苦笑したのだつたら、雨軒居士だつて一應は苦笑せねばならぬ筈だ。科學と宗教と其して哲學の様に文學にも欠伸をせねばならない筈だ。

雨軒居士は、一日中大抵は書齋に引込んでゐる。妻君に言はすと、邪魔にならぬので、此の點だけは彼の善い所ださうだ。然し、蟄伏したが最後、いつかな出て來ないので時々妻君も持て餘す事がある。雨軒居士の無頓着さは蓋し人間離れがしてゐる。妻君も此れには大分惱まされてゐる。一寸油斷するとネクタイ無しで外出したり、甚だしい時には外出先へ帽子を置き忘れて其のまゝノコ〳〵歸つて來る事さへある程だ。

書齋は玄關の右手の日本間を洋風の應接室にした其の次にある。雨軒居士の言ふ第一書齋とは此れで、四疊半の日本間だ。室の周圍には入口を殘して頑丈な敷段の棚を造つてギツシリと書籍をつめ、餘つたのは更に疊の上から石垣でも築いた様に累々と天井板を突抜く程に積み重ねてゐる。全く足の踏込み場所も無い。時々この書籍の垣が恐ろしい音を立てゝ崩れ落ちる事がある。妻君は、物騒がつて此の室にだけは這入つて來ない。雨軒居士の入らずの部屋とは此處の事だ。此の室には僅かな空間を置いて汚い古風な机が一つ頑張つてゐる。殺風景な事は猫庵君の書齋以上で、然も猫庵君のよりは危險性がある。うつかり這入れない。雨軒居士は時々この部屋の一閑張りの机に凭れて居眠るのだから、其の度胸のいゝのには感心するの他はない。

第二書齋がある。其れは一番奥の部屋で八疊敷程の洋室。洋室と言つても、大体が日本家なのだから、應接室と同じく日本間を洋風にしたケチな洋室に過ぎぬ。此の室の中央には途方もない大きな長方形のテーブルがある。第一書齋と違つて危險性は避けてゐるが、やつぱり室の周圍には書籍が亂雜な垣を造つてゐる。本、本、本——だ。妻君は時々、書籍が殖へる程に金が殖へてくれたら、等とこぼす。無理はない、雨軒居士は元來が金とは緣い薄い方だから——。

「貞ちやん、氣毒だけども一度行つて來て頂戴。默つてゐたら晩まであのまゝだから——」妻君は、臺所で奈良漬をカチカチ切り乍ら妹の貞子さんに言付ける。

「何か書いてらしたわ。手が離せないから少し待つてくれつて——」。

妻君、貞子さんの語尾を掬ひ上げて

「なか〳〵其んな事では動かないから、一緒に連れて來て頂戴。」

貞子さんは命ぜられるまゝ茶の間から姿を消す。

「怎う？」

妻君は貞子さんが歸つて來るなり聞く。

「筍を喰べさすかゝ仰言るから、差上げますゝお返事するゝ、では貞ぐに行くゝ仰言つたわ。」

「アラまあ、子供の様だわね」

妻君は苦笑する。

間も無く雨軒居士が現れる。痩せて頬骨が高く、淺黒い顔に無精髭を生やして、赤銅縁の度の強い大眼鏡を光らしてヌッゝ立つた風態は、ざう見ても餘りいゝ人相ではない。

「貞さん、今日は競走をやらう。」

「えゝ?」

「飯喰ひ競走サ。」

「まア——」

貞子さんは面喰ふ。

「早喰ひ、大喰ひ其のごつちでもいゝ。」

妻君。色をなしてきめつける。

「其んな事をツケ〳〵ゝ仰言るものではございません。」

「悪いかネ」

雨軒居士はけろりゝする。

愈々食事が始つた。貞子さんは妻君ゝ並んで綺麗な歯並を見せながら行儀よく箸を運ぶ。妻君のすぐ下の妹で年が二十。秋田生れの妻君に似て痩せ形なスラリゝしたいゝ体で、未だ妻君よりは少々背が高い位だ。妻君は例外だが秋田美人は世に定評がある。この秋田系だけに、貞子さんは美しく其の上に厳格な家庭に育つたので何處か氣品がある。新しい教養があるに不拘、極めて温順なので、今時の若い女性には珍らしいゝばかり、雨軒居士の大の氣に入りだ。愚鈍で圖々しくて辛辣な所のある妻君の妹だゝは思へない。雨軒居士は、時々貞子さんを呼びつけて秘書代りに使ふ。著述の手助けをさすには、妻君では役に立たぬ。妻君は時に貞子さんを姉の威光で叱り飛ばす事がある。するゝ貞子さんの助太刀に必ず雨軒居士が出る。怱ふなるゝ事が面倒だ。妻君、一層柳眉を逆立てゝ狂亂する。ゞゞ雨軒居士が閉口して謝つて幕が閉ぢる事になつてゐる。平常は彼女等ゝも至極圓満だ。

「今頃、支那の田舍地方の山寺へ行くゝね筍の小指程なのゝ木耳を油炊きにしたのゝを喰はすが美味いもんだよ。」

雨軒居士は筍を頬張りながら饒舌り出す。妻君は、こぼした飯粒を摘み上げて小皿のふちになすりつけながら言ふ。

「筍は今頃か喰べ頃でございますわね。」

「筍で思出すが、曾つて譚家の蘭葉君ゝ浙江省に行つた時、天童山ゝいふ所で竹の多いのには驚いたが感心したのは盜伐を妨ぐ爲めに竹の一つ〳〵に丹念に天童山ゝ刻りつけてあつた事だ この竹きるべからず、なんて立札して物騒な針金なんか引き廻してゐるより餘程詩趣がある——」

雨軒居士、變な所に感心する。

「この筍、少しかたくはございません?」

妻君、天童山でも地童山でも問題ぢやない。貞子さんは行儀がいゝ。雨軒居士や妻君の様に喰べながらべちやくちやや饒舌らない。つゝましく、靜かに手ゝ口だけを動かしてゐる。

「心得の善い者は例外だらうが、長らく下宿生活をやつた者はごうも食卓禮儀なんて事は駄目だね。」

雨軒居士、何を言ひ出すかわからない。

「何んでございますか?」

「下宿生活をやるゝ、放縦になつて其の上に意地が汚くなつて

ごうも善い癖はつかぬ。尤も下宿屋にもよるけれごね。」

「さうですか知ら——」

「わしは學生時代からかけて相當下宿修業をやつたが、運が悪くつて碌な下宿にゆきあたらなかつた。或下宿では、學校の始まる時間が迫つて來ないと朝飯を食はさない。これだけで癪に觸るのに、加へて食事の度毎に主婦が臨席して、誰さんは空腹だつたのか何杯召上つたとか何んとか不埒な事をぬかすのだ。生意氣だとばかり同宿の友人と相談して逆襲してやつた——」

「まア」

「其處は素人下宿でね。わし共三人ト宿してゐた。で、食事の時には二階から降りて皆んなが一緒に食事してゐた。逆襲の方法は先づ倍食すること、例へば二杯飯の者は四杯飯に、四杯の者は八杯と言つた風にね。」

「まア。」

「わしは八杯組だつたよ。」

「ホホヽヽヽ……」

突然、貞子さんが笑ひ出す。

「喰つて喰つて喰ひあげた結果、後で腹ごなしに二階でドスン〳〵角力をとる、体操をやる散々な騒ぎだ。この戰法は美事に功を奏して二日目に下宿側が叩頭平身して妥協に來たがね。」

雨軒居士は且つ饒舌り且つ喰ふ。

「一度はこんな所もあつたよ。其處は下宿代の高い割に拙いものばかり喰はす。で、憤慨した吾々は下宿人會議を開いて委員を選び屢々交渉するが餘り効果が無い。この委員ごいふのが面白い。醫科に籍を置く者は、お手のものだけに榮養論で談判するし、經濟科の者は經濟論でまくし立てる、法科の者は下宿人權利論で行くごいつた具合で、總べて紳士的戰術で亂暴な示威は一切やらない事にしてゐたが、到々爆發してね。」

雨軒居士、喰ひながら饒舌るのでなか〳〵忙がしい。

「交渉徒勞と知つて、或日の事、各自申合せて飯櫃の底に墨でバカヤラウと書いた。中には念を入れて小刀で刻んだのもあつたよ。飯櫃の底とは考へたちう。この意味が解るかね」

「さア？」

妻君、話に思はず釣込まれてゐまふ。

「飯櫃を洗つて乾すだらう、其處をねらつたのだよ。一味徒黨は其れを限りに、其の下宿を出てやつた。飯櫃がズラりと並んで、バカヤラウの行列は一寸壯觀だつた。二昔前の事だ、今時の學生はこんな馬鹿な惡戲はやらないだらうね。」

「惡い事を——」

「氣をつけるんだね。」

「何んでございますか？」

「これから拙いものを喰はすと古いが此の一手をやるかも知れない。時々飯櫃の底を見るんだね。但し家は出て行かないよ。」

「まア〳〵」

「ホホヽヽヽ……」

妻君と貞子さんとは顔見合して笑ふ。

雨軒居士、何を思出したか突然食事を中止して立上る。妻君あつけにとられて

「アラ！」

「忘れてゐた、すつかり——」

「何んでございます？」

雨軒居士返事もしないであたふと次の間に消えてしまふ。

（つゞく）

近作俳句

路郎選

冗談のやうに課長が馘首になり　大阪　沐天
三十の春にあせたる絣紺　同　同
ひねくれて心解してゐる酒場　同　同
一分の遲刻へプロは氣をつかひ　同　同
鯛持つて行けばピアノが鳴つてゐる　叡ヶ池　愚龍
ゴミ箱に玉葱の芽が伸びてゐる　同　同
奥樣を家内總出でお迎へだ　同　同
雨晴れて土管の中の勞働者　大阪　海洋人
いやな使地圖まで書いて渡される　同　同
唇のかはく淋しさひとり寢る　同　同
花環又樂屋をせまくして通り　名古屋　鍋人
妻病んで食ふ事だけの日を暮し　同　同
妻の力が音になつてる井戸ポンプ　同　同

地下鐵

海士

—故郷の事ども—

加納山茶花

本誌六厘坊忌の、川村花菱先生の講話「武玉川の人間味」は非常に面白く拜聽いたしました。その中に、一つだけ氣付いた事がありますので、少し愚見をのべさせていただきます。

今でた海士の荒い鼻息

此句に付いて先生は、長い間水にもぐつてゐた海女が大きく息をしたと言ふ句意であるが、女がハアハアと息をしたと言ふ所に性的な何物かゞ有るのではないだらうか、と言つた樣な意味で、お話をされたが、武玉川には、海女でなしに海士と成つてゐますので男でないかと僕は思ひます。此句は水面に首を出した海士が、ブウーと大きく息を吐いたと言ふだけの意味ではないでしようか。僕は前からさう信じてゐるのですが、間違つてゐるのでしようか、幸に御教示下さいませ。

本誌第七卷第九號の、蛭子省二先生の「土佐句テニハ」は、僕の生國が土佐であるため

行くとこへ行けば女の強さかな　釜ヶ池　奈緒美
石ころを金の氣で拾ふ日のあり　同　同
空想へ熊笹死ねとさゝやいた　同　ひさし
十圓が身にあまるとは情ない　東京　同
しばらくは他郷と出たが死んだのか　同　同
不納からけされる灯をも子は知らず　同　同
落第の代りに戀が成り立ち　神戸　富士雄
てキリストにすくはれぬ人達者なり　同　同
麻雀をしても不運が付き纏ひ　三重　沃里
蝕を遁れて病院に居る　同　同

心の友へ

さびしさを云ふて來ないがさびしいぞ　松本　民郎
しんみりと話せば三味のきたなすぎ　同　同
そこらぢゆう蠟をたらした探し物　神戸　嶺月
さびしきものは病室の白さなり　同　同
赤い下駄春の川邊に忘れられ　鳥取　湖山
鑵詰の鑵切る音に櫻散り　同　同
繋船の今日は南の風をうけ　神戸　不然
此奥に貸家あり子等夥し　同　同
ポスターは春の踊の長い脚　大阪　秀味

に、特に興味深く拜見いたしました。

お月樣桃色、誰が言ふた、海女が言ふた

海女の口引さけ

思出の多い歌です。月が裏山に姿を見せて波に影をくだかれる頃、膝に抱いて、母が歌ってくれたなつかしい歌です。

此俚謠に先生は、海女と書かれて有りますが、僕は海士ではないだらうかと思ひます。土佐には昔から海女はなかつたやうです。今でも男ばかりです。（最も今は朝鮮人の海女が來てゐますが）土佐は女の働かない國です何故かと申しますと、貧乏人の多い國ですから、昔は「間引く」と言つて女の子が生れると壓殺したのださうです。僕大阪へ來て「土佐の鬼國子を殺す」と言ふ言葉を、何回も聞かされましたが、此事を言ふのでしよう。

そうした理由で、女が少ないために、自然大切にするやうに成つたのだらうと思ひます。それで昔は掠奪結婚の風習が有りました。「嫁擔ぎ」と言つて、今はどうか知りませんが僕の十二三の頃ですから、十年程前までは事實有りました。町の若者が五六人で、かれて物色しておいた女が外に出るのを待てゐて擔いで歸るのです。實に亂暴な話です。そして翌日相當な仲人を立てゝ貰ひに行くのです。習慣に成つてゐますから、親達も仕方なくやります。今だつたら、誘拐、强姦、監禁罪です。十年前もおそらくさうであつたでしようが、土地の風習ですから、警察も仕方なく、默認してゐたのだらうと思ひます。

蚊のこゝは説明もない住宅地　同
名違ひをした玄關は逃げるやう　長野　蛙鼓
昨夜迄店が立派に開いてゐた　同
恥しさわすかの金に喜ばれ　大阪　四五磨
下は鯖二階は日ざし燒くにほひ　同
接木よくしけつて父の一週忌　大阪　吐句坊
立話笑へば女走りすぎ　同
委さねば委さぬ樣に勤める氣　服部　利生
淋しさは旅先でみる檢温器　同
靈感を尻つほの端に知つた猫　大阪　勝二
生ぬるい親父へ髭が一分のび　同
子が出來て今年の春は家に居る　龍田　翠峯
姑の折れて來たのも痛々し　同
春の女夏の女こゝ惱ましく　大阪　大呼
白日に多角な戀をさらけ出し　同
金魚まで笑つてるよに見えて春　長野　有爲郎
祖父はもう寢るつもりにて飯が濟み　同
失業後高が女に養はれ　大阪　沒食子
それかこて俯下をすれば尚乾干　同
勇退こ云ふこゝにして襟寒し　宮津　靜眠

正式な婚禮は、新郎が、新婦の內へ出迎へに行くのです。此れも女を大切にする傳統的な習慣だらうと思ひます。

濁水氏の句

珊瑚屋はちつとも切れぬ音で鋸き

ちつとも、は土佐言葉です　大阪ではちよつともと申します。珊瑚を引くのは、割竹を四五枚合せて、弓にした物へ針金を張つて金剛砂をつけて引くのです。キイキイと呑氣相に引いてゐます。

僕が本誌へ書いた「田舍雜話」に、七夕を裏へおまつりすると書いてあつたのを、表と直して發表してありましたが。あれは校正の早合點でしよう、大阪では表へまつりますが土佐は裏です。二本竹を立てゝ、間に注連を張つて、鬼灯や茄子をかけます。そして白粉や紅をお盆にのせて、其前へ御供へするのです。（五、九）

藪じらみ　（B）

尾崎海洋人

野に山に里に、小さな闇がムク〳〵と擴つた。近頃、惱ましげな存如（連女上人の父君）の顏が、春になつて、からは一層惱ましく見えた。

長廊下を、渡つて行く、……梧桐の葉が頭の上でカサ〳〵と鳴つた。

「別離は辛いものだ、自分の愛着がつきぬ中は……」存如は空を見上げた。

春の朧月——それを何時迄もジツト見て居た。——（四月二十九日作）

嘘あまりあざやかに出て顔を見る　同　同
二尺程雨戸を開けて御出勤　大阪　樹光
案内は皆の代りにおがんごき　同　同

道頓堀の夜

歸つてもつまらないのが春を飲み　盞ヶ池　沙門
芭蕉の葉神經質の音を立て　同　同
食ふための孝行はやし立てられて　大阪　柳次
衣がへ青春といふ肩の線　同　同
巨軀堂々と友は見舞に來てくれた　盞ヶ池　百五吉
看護婦もやゝ女めき春となり　同　同
踝を持つ手に桃の花見上げられ　大阪　黒犬子
榮轉は土の匂ひをかゞされる　同　同
自動車も新婚らしく搖れて晃れ　神戸　素生
旅人へ山は裾から暮れるもの　同　同
珍らしきものを托する孝の端　大阪　夕鐘

あ る 工 場

九人まで生ける機械になつてゐる　同　同
義理の仲ですと巡査へ云ひ放ち　神戸　睡花
ラジオを止めて金を受取る　同　同
犬までが資本家びいきほへてゐる　大阪　方眠

酒を酣めつゝ

十三紋堂主人

藝者はお座敷で三味を弾くか酌でもする方が適任でもありまたさうした要求のもとに生れた物だつたが時代の變遷は急激に追つて來た、女給群の進出とダンサーの出現はテンポの早い社會の要求が必然的に生んだ産物である、だから椅子に倚つて赤い灯青い灯を唱ふのは彼の女等でなければならない、ステージに立つて踊るのはダンサーでなければ工合が悪るい、四疊半式趣味は如何に濃艶なる情味を發散させるものであつても粋な遊びであつても最早それは過去のものとされだんだん〳〵此時代から遠ざかつてゆく、斯くなりては藝者なるもの取澄まして納まつてはゐられない、故に宗右衛門町の大和屋でさへ屋内にバーを設へ一流藝妓をサービスをさせたり、ダンスのお稽古始めさせたりといふ趣向を案じだした、相當の姐さん株でもそつと酒場へ出て女給群に伍してサービスの白兵戦を演じお客様なるものを少なからず面食はせる所もある、僕は斯ふした事實に當面して一方に川柳を考へながら、職を奪はれんとする藝妓ガールにも同情して側隠の情禁じ得ずといふ自己催眠にかゝつたが何としても出場所がつり合はぬピタリと來ぬ、然も四疊半情味を知る者にとつては一沫の暗影すら投げかけられる、況んや椅子へ細腰を落して三味抜きの歌澤など唄ふ姿を見ると、昔し奉行所で算盤責めといふ強問にか

くよくよと思へば損の又つゞき　同　金澤　木偶人

女學校を楯につんつんして嫁ぎ　同　同　巧笑

酒の香のするもむべなり春の寺　愛知　啞聲

むつゝりへよいお天氣が續くなり　明石　桃太郎

嫌な日もあり食ふための三味を彈く　大阪

降り阪もう看護婦はさからはず

結婚

女房がお前に決つたつまらなさ　島根　龍村

まゝごとは夫婦喧嘩の眞似までし　新潟　爲八

うかゝと來て乘合で戻る春　大阪　八歩

強情な女淋しく引眉毛　同　志洋

その目つき故に巡査に疑はれ　石川　溪鷺

喰ふだけを樂しむ彼に胃痙攣　大阪　天絞

團體に置いて出た孫案じられ　鳥取　耕民

賣る筈の合服を着て醉ふて見ん　大阪　大夢子

笑はされまいと視線をそらしゐる　同　山茶花

便所迄教へて送る母の旅　神戸　竹風

出し損のその上贈賄罪とされ　長野　柳兒

二期と云ふ咳も怺へてウエートレス　尼崎　盧白

化粧して公設市場へ出かけたり　大阪　いわを

けてゐる感じで傷ましい限りのものだ、酒の醉ひなぞ一遍に醒めて蒼然となる。

女給相手に赤い灯青い灯に憧がれる若人達は藝妓相手の四疊半式趣味の粋は知らない、一方藝者買ひなる趣味を知る者は赤い灯青い灯の時代的要求なる尖端趣味を知らない、それは武玉川柳樽だけの趣味を知つて時代の要求である新らしい川柳を嫌ふ如く、又新らしい若人達は通とか粋とか洒落た事は知らない、古川柳家はダンサーと抱き合つて踊るのを見るとヘドを吐く位ひ感情を害して終ふ、併しそれが時代の要求であるからには、如何に何と云つても、藝者ガールの如く古るい川柳は、やがて凋落してゆく事は、爭ふ事の出來ぬほど、現實的である事を見せつけられ、これを知らない迂濶千萬な川柳家のないでもない事や、川柳がたゞ赤い灯青い灯だけでもない事を知らぬ若い人達やの存在する事實に思ひを走せる時、川柳は前途何百里かと考へさせられると、酒の味が理につまされる。

プペダンスと玉木座

三輪五輪

四年振でなつかしい東京の土を踏みました。行つて見たい所會つて見たい人決して少なくは無かつたんですが、結局はほんの一部分だけの希望を滿たしたに過ぎませんでした。

しかしとも角新東京の副產物として餘りにも有名な玉ノ井とか淺草を代表して居る

職業を得て娘等は賣れ殘り　同　朋晴
心中か一寸待てこは失禮な　同　凡々
一人居て時計がこまつたのに氣付き　宮津　水郎
踏切で待たされたゝけ遲刻をし　大阪　青兒
それ故に私は他所へ貰はれて　同　浮大盡
嘘一つ云ひ得ぬたちで煙がられ　同　愚坊
自殺する人に出來てる藝術家　大阪　泉流
朧夜の花を廻れこ一人なる　京都　相界
巡航船思想の古い人を乘せ　大阪　日日城
怒られる時は倅の資格なり　同　奇可愛
生活の疲れ寫眞にも出てる　石川　しこし
戀もなく過ぎてうつろな青春よ　大阪　おさむ
春雨にしつぽりぬれてゐる乞食　廣島　露斗
花よりも見物の日傘美くしく　泉北郡　凉哉
二次會に帽子までこもに乘つてるず　神戸　青水
金借る時の卑屈さを妻は知るまい　兵庫　雨聲樓
入營へ近所の人もあらたまり　福岡　靱川
こゝのわぬ髷退院の春さむし　松山　春帆
踊りまだ止まず社長は禿けて居る　大阪　虹一
親だから吉を祈つて引くみくじ　同　あや美

プペダンス玉木座を覗いたりした事に依つて私は相當の滿足をして歸つて來ました。

玉ノ井を今更喋々と言ひ立てるのは私の野暮つたい事を立證する樣な物ですが全く以つて斷然驚いちまつたんです。上海歸へりとか云ふ斷髮モガが惜氣もなくひやかし客に正眞正銘の商品見本を出して見せるんですからね。本當に「嫌やちやあ有りませんが」つて言ひたく成りますよ。そんな譯で夜店のカツレツより、もつと油つこい物を食はされた感じで早速尾を卷いちやいました。

次にプペダンスとかノーズロダンスとか云ふ變てこな踊りですが蚊に食はれた跡がふくれ上つたりした脚を馬の樣にはれ廻つて踊るんだから寧ろグロです。でも三十幾つかと云ふお婆さんが十六七の小娘にまじつてキヤツ〳〵つて聲を上げて踊るんだから罪は有りません。

たゞ譯もなく笑つてさえ居れば見物としての義務は濟む譯です。

淺草から萬世橋まで地下鐵に乘つた事を話したら頭から田舍者だつて笑はれました。「貴方地下鐵」の八十さんの名詞も今東京では流行りません。第一地下二十尺ものこ〳〵下りて行く時間が惜しいんだそうです。道路の良い事タクシーの安い事は四年前と雲泥の差が有りました。「變る隅田の七ツ橋」に鄕土愛を感じ乍らもあの單線で電車を通して居た時代の永代橋がしのばれて淋しかつたのです。歸りに遲時乍ら三等寢臺に乘つて見たんですが金一圓五十錢也の効果が餘りにも大で有つたのに驚きました。

晒布でも曳いてく樣に凪を船　明石　了念
イッチよい宿を團長見つけて來　鳥取　暢山
爆音を仰げば春の日がきらり　東京　救命
人並に着物も欲しい花が咲き　大阪　千里
一錢とあなごつてゐる面白さ　三島　素萠
恩給が支へて呉れる命なり　呉　光哉
三ッ指は晝のものなり奥樣よ　石川　醉羊
笑はれてゐるとは知らず貢ぎに來　金澤　今雨
湯たんぽも跳り出してる春の夢　大阪　ぎさん
先曳の犬が道路の幅を奪り　高知　春水
何がさて買ひたきものの多い春　大阪　哲郎
遠慮して居ればいゝ氣な社長の子　同　菊路
夢なんぞ見ない雀を羨やまれ　犬山　練屋丁
氣の永い事は母親ゆづりなり　愛媛　英賀夫
下手將棋助言でたらず手が延びる　螢ヶ池　舟路
駈落ちのお蔭で今は夫婦です　同　俊郎
病上り陽もぬく〳〵と嬉しうて　同　九品
けち〳〵としてゐて金もためてゐず　同　呉柳
はるかなる大阪の空にほしが飛び　同　實德
ハーモニカ故郷の空へ吹いて見る　大阪　清光

二つの點景

微苦笑 ―

中西おさむ

大變お話が下卑るやうですけれど私はよく百貨店を共同便所に役立たせることがあります、（私に限つた事ではないのですけれど）

此の間もM百貨店の近くで所謂その神經が働いたので、早速M百貨店へ、すました顔で入つて、用を足して、手洗所でゆつくりと手でも洗つて、悠々と引上げて來ると、出口の所で、女の子が二人聲を揃へて、いとも慇懃に「ありがたう御座います」と頭を下げた。

× × × × ×

（ありかたう御座います）それは彼女等に與へられた仕事の形式である、彼女達の心ではないのである、兎も角も器械である彼女達は何にも知らないことなのである。

だがその時、私の腹の中からは、氣恥かしさよりも一足先に微苦笑が湧いて出た。

大正橋 ―

此の間、湊町から、境川行の電車に乘つた私の隣席に、洋服を着た紳士風の男が二人腰を下した。丁度電車が、大正橋の停留所前まで來た時、車掌が大聲に「大正橋」「大正橋！」と呼んでゐるのを聞いて、隣の男の一人が他の一人に向つて、

「この橋は大正以前には無かつたものらしいんだね」すると少し間をおいて、話しかけられた方の男が、得意らしく言ふのに、「すくなくとも、これは大正以後に架けられた

鳥居から忌中の事をフト思ひ　鳥取　青水
顔だけで言つたがいつそ散髪し　螢ヶ池　美玉
來世はゆめ人間に生れまじ　同　可章
死ぬのだから正信偶も覺えでき　螢ヶ池　長二郎
蒼空の高に呼びかけん魚を釣りつゝ　同　亂果
夕刊が來るなり主人相場欄　大阪　雄花坊
アーク燈に俺の世界が丸見えだ　同　洋々
鼠あわてるな今日の轉宅に　鳥取　源太夫
ナフタリンだけが箪笥に殘り、春　金澤　白雨
入學へチト長すぎる雨合羽　神戸　青水
ネオン燈銀座の夜にほつとする　京都　水馬
定期券立替へますのビラを見れ　粉濱　忠彌
血を吐きてしばしは我を哀れみぬ　螢ヶ池　かづを
あの藥効きませんかと首を振り　同　峯月
この戀が自殺さすとは知らぬのか　同　石松子
それ程にして資本家の肥へんとす　大阪　千草
こつからが海なんですと帆が一つ　螢ヶ池　喜久兒
性慾の虫が身体を這ひ廻り　京都　丁路
騷ぐなさはぐな人も死ぬるさ　螢ヶ池　白眠
靴穿いた遠足の子へ青い空　神戸　笹舟
首切りの噂が止んで春になり　螢ヶ池　禮二
旗日でも主任の出勤變りなし　伊丹　松好齋
惡友に又別な道おしえられ　螢ヶ池　梨風

ものに違ひないよ」

× × × × ×

何んと譯のわかつた話ではありませんか。然しながら私は不幸にして、大正年代以前に於ける「大正」なる文字の用途の有無を知らない。

初心者

岩垣奇可愛

どこの句集會にでも決つたやうに「初心者歡迎」の「初心者の出席をお待ちします」のと書いて有る。一体この初心者とはどんな初心者だらうか、ちつとも川柳を解しないもの、ちつとは解るが作れないもの、そろ〳〵作句をやりかけたもの、少々は作れるもの、等……之れはどれもこれも初心者に異ひない、けれども「初心者歡迎」の初心者はまるつ切りの初心者も含まれて居る事は事實で有る、そしたら之れ等初心者は果してどの句會でも心ゆく迄歡迎して居るだらうか。ちつとも川柳を作れない初心者が有つて、之れから川柳へ出發しやうと思つて出席したとする、行つて見ると作句も出來なければ話一つ交へる事すらも出來ない。こんな人が歸つた結果はどんなだらう、隨分つまらなくて再び行つて見る勇氣は無からうと思ふ。つまり句會に初心者歡迎の五字が有る爲めに川柳を誤解される事になりはしまいか。

初心者をほつて置くのなら歡迎の字は無意味だ……不必要だ。

當にして來たが初心はほつとかれ

初心者はお茶の一パイ丈けで去に

湖の微風

——伊藤綠之助君の作品を回りて——

松丘町 二

周回十一里、中國山脈の水を蒐めて威大な一碧の水盤と化した。——こんな風に書き出すと吉臭い美文めくが、宍道湖の水は凝然と固定して、小波の腹すら見せる日は少い。その波の腹から生れる微風は、この湖を繞つて生活する人々の詩心を撫でゝその睡りを醒すのだ。まこゝに松江を中心として詩人は多い。優れた素質の人々も從つて尠くないが、宿命的に水盤の運命に貫かれた湖は、情熱の波立を許さぬ。それは革命的な暴風を知らぬからだ。形式は内容を決定する。詭辯めくがこの湖の形式が、それを取巻いて簇生する詩人といふ内容を決定してゐるのだ。歌、俳、詩、悉くが湖の微風に甘んじてゐるが、この點川柳が一番素晴しい。すぐれた素質もすぐれぬ素質もおしなべて湖の歷史と形式を守つて泰然とゆるがぬ。誠に素朴にして誠實な風景である。

だが我々は奔流の變化は靜水の變化に比べて一層錯雜であるといふ何等の根據を持たぬ。例外はこゝにも在る。歌、俳、詩時に期待すべき異端者を生む。川柳亦然り。この塲合湖自體をして云はしめれば、形式は必ずしも内容を決定しない。かゝる人々はつい背中合せの日本海の怒濤か育むのか。私は今湖が生んだ異端者異彩、綠之助君の作品について語りたい思ひに駈られる。

一、いゝえ夫婦までとは思つて居りませぬ
二、山吹の明るさ鷄がきて坐り
三、あゝしかばねをまもりぬいてゐるよ

一見異質と見えるこの三つの輪が、ぐるぐると自轉しつゝ作者の周圍を廻轉する。旋回が劇しくなるにつれて次第に三者は情熱の火華を散らしながら太々しい一つの環となつて進んでゆく。

一及二の句は嘗て月評に上つて尖鋭批評家諸君によつて論じつくされた。私はこの句からモガや不良少女と正反對な立塲に

在る弱い諦観的な古い女性を連想する。眞實な戀に生きる女、戀することが彼女にとつては生きることの全部であることを知りつゝも、盲目になりきれぬ弱さは、浮世の義理の強さを身を以て知つた女の哀しい言葉であることを『いゝえ』『居りませぬ』といふ表現形式から受取る。

思へばこの一句が作家綠之助の今日を豫約する貴い第一歩であつた。この基點から生れた句を列記すれば

欺すだろと云へばさうよと否定せず
三月があなたの顔をほかしたね
お前のイットがゆれてゐる春があほい
夜な〳〵の灯に青春を盜まれむ
紅梅にこの頃の戀さけすみて
抱き合うてかなしいことは云ふまいよ
桔梗よやつぱり少女的なる御身

ある女性に（二句）

バンブかも知れぬ心で紅をさく
倫落につかれし心空も見ず

序に初揭第三の句に屬するものを擧げると

私の病氣勝手に決められた
ごろ〳〵に燃ゆる心で死を呪ふ
人間と酒と比べて見る夜かな
酒の氣の離れかけたる泪よな
應接の百圓紙幣に微風がある
つまり徽のやうなサラリーマンよ
トラックに乘れば味方だマルクスよ
百姓に米のなくなる日が來るぞ

アプトン、シンクレアのいふやうに、一切の藝術は宣傳だとも云へるのだから、作品に於ける個性的な閃きこそは作者の根性の表れに外ならぬ。これは作者が望むと望まぬとに拘らぬ。この多かれ少かれ根性まるだしこいふことは、川柳がこの世で演ずる最も美しい喜劇の一つだらう。この喜劇を愚劣と觀ずる人々は凡そ私の思案の外にある。

以上揭げた句にも固より作者の個性は窺へやう。だが綠之助君の根性まるだしの句とは次に揭ける『山吹の明るさ鷄が來て坐り』の初揭第二句の輪が生む諸句だ。

ほつねんと春を見送る桑畑
曾て給にもなき月の小川なる
燒跡へ何をした吹雪であることか
口笛口笛夏の夜を越えて
ひとり身にさびし綿入れの皺
麥畑辨當箱が捨てゝある
大根を抜けば蟇が死んでゐる
拿しと思ふ打穀の中の父
寒さうな口笛で芋掘つてゐる
天井が何か云ひそな夜の梟
日本を論じ吹雪のある日なり
醉ひがさめたら嵐をきゝなさい
お寺の屋根が昔の月を慕つてる

大雨大出水

街道を横切る鮒の列を見し

綠之助君の作家たる異彩はこれらの境地に於て最も顯著だと

私は信ずる。この一つ一つの句についてうまいこか拙いこか少しばかり書いたところで、面白がるのは當人だけだ。だが作品の評價は個人の鑑賞の上に築かれる。この文章を讀んで下さつた諸君が、改めて綠之助君の作品を最一度鑑賞の俎上に乘せて下されば、これを書いた私の目的は達せられたこいふものだ。

五月號の『川柳に對する疑惑』こいふ綠之助君の文章は、近頃私の腹にこたへたものゝ一つだ。衛生無害な川柳禮讃はあつてもなくてもいゝ。あつても別に差支はないが川柳への正當な懷疑を眞劍な疑惑を卒直に語る綠之助君だ。たつた一頁の短いものではあつたが、覿藥の効能書みたいに空々しい論文の横行する現柳壇に、珍らしく眞實を語つたものこして、作者の惱みが素直に受取れた。私はいつも川柳論の裡に、人間らしい聲をきかうこ望んでゐる。たまには桁外れの論文も現れていゝではないか。若しその桁外れが、眞實を語らうこして語るここの困難のために、嘘に反逆して表れた逆説的詭辯的結果だこしたら、正に結構ではないか。たゞかゝる理論の孕む危險は、讀者がその反逆された嘘のみを眺めて作者の意圖した眞實を見遁して仕舞ふ點に在る。眞實を語つて大膽卒直な人々を、私は私の周圍に見出すが、惜しいここにやゝもすればその實踐的情熱を缺ぐ。ぎんなに幼稚で間違つたここでも、ズバ〳〵云ひきる言葉には何等かの暗示性こ迫心力がある。誤りを犯すここを恐れてゐては、人は啞になるより仕方がない。私も亦自己批評の一つの實踐こして作家論を書いた。諸家の作品をダシにして自己を語つた。眞實を語らうこして、私の時評的文章は屢誤りを犯してきたらしい。『矛盾したここを云つて俺を苦しめてくれるな。人は何か云ひ出した時は迷ひ出してゐるのだ』このゲエテの鼻唄が私をうつ。理論が不得手であるここを公言して誇りこし、昔ながらの戯作者根性に新意匠を被せて、のうのうこ川柳創作の筆が揮めてゐられたら、私も亦幸福であつたらうに。——こはいさゝか脫線こ共に感傷めいてきた。後へ戻らう。

『懷疑こいふ言葉は、自分こは何ものかこいふ事に關して積極的な確信をもつここの困難を意味する』こ。誠に川柳作家の懷疑こはこの世に生きて何故川柳制作なごを行ふのか。何故川柳を作らねばゐられないのか。そもそも川柳こは何者ぞ。こいふ事に關して積極的な確信をもつここの困難を意味する。又曰く『懷疑こは認識の苦痛困難を稱するのであつて、認識の彷徨漫歩を指さぬ』こ。誠に屢川柳認識は苦くてしよつぱい懷疑を肴に微醺を帶びる。そして鼻唄まじりに彷徨漫歩を始めるのだ。私は綠之助君が川柳への懷疑を確信を以て語る日の到來を期待する。それは少くこも綠之助君にこつて『新しい川柳』の誕生こ時を同じうするであらうここを信ずるから。

月評

作家展望

紋太　素人　琴人　ひろし　山雨樓　町二　亂耽

阿部閑生

一、脊の子の眼脂も拭かで醫者通ひ
二、春愁の妻老けて見え若く見え
三、咲いた話散った話に風呂ぬるく
四、病妻のそばへ冷く寢床敷き

琴人——この作者の舊作に

欠伸せばしやつの釦に顋觸るゝ
思ふ事なけれど瞼明けてをり
火ありて土瓶掛けたり卸したり
人の心のはなれ〳〵に火鉢抱く

以上の句から作者を窺ふ時は、こんな自由な人々の生活は兎角に倦怠を覺え勝ちである事を知られる、そうした人の生活を貧しい人から見ると、階級的に羨望の的となるが、さて餘り結構すぎるのも倦きが來るものだ。その間の消息が以上の句によつて覗はれると いふ事になる。何もする事がない、否事實はあるのだが、する氣が起らぬので、もし少しでもそうした倦怠から救はれる時があつたとしたら、「何も無き秋の庭に手を入れる」位の時である。然し人間だからそうした生活ばかりではない。男は外に出れば、責任の重い仕事は山程ある。そうして疲れた時は「魂魄は車輪についてめぐるらん」と云ふ激務の所感が起きるが、又思はぬ拾いものもある。「拾はんとすれば帽子は生きて逃げ」「からくりの交通巡査考案中」思はず獨りで微笑むであらう。だから川柳はやめられないとなる。これ等の句から作者を見ると決してプロレタリヤでない事が肯ける。然し眞面目な修養ある人である事を思はせられるのは 次の句がそれを示してゐる。「夕雲の動きこの子は育つまい」「憂鬱の君をめぐりて蠅一つ」「病妻のそばへ冷たく寢床敷く」「哲學がちびり〳〵と酒に溶け」以上の通りで、それから作者の作句傾向を見ると、所謂古い川柳味と云ふ畑から脱け出て、新らしい詩感に訴へて詠んとしてゐる樣子である。

亂耽——閑生氏の句は、一口で云へば所謂稚拙の句が多いと思ふ。琴人氏の云はれた如く川柳の傳統味から一歩進んだ境地に這入つて居られる事は確かである。然し句の形式にフレッシュさが乏しく、飛躍が少ないと思ふ。善く云へば一家を成した川柳家であり、惡く云へば型に嵌つて その桎梏に惱んでゐる作家であるとも云へる。然しこの作家が自己の生活に そのスタートを置いてゐる事は私達の敬服すべき點だと思ふ。

琴人——今亂耽君の云はれた フレッシュさと飛躍が少ないと云ふ事は同感である。然し僕はこの飛躍がないと云ふ半面に、大膽に卒直さを認める事が出來ると思ふ。それを充分に伸しきつたなら 完成された句が多く生れると思ふ。

紋太——僕は閑生氏の哲學が 解り易い言葉で示めされてある事を 兎に角喜びたいと思ふ。

町二——嘗て氏が僕に、君の句は鋭さは充分だから少し鈍な句も作り給へ、と云はれた事

があつたが、矢張りそんな意味、立場から作句してゐられる様に思ふ。表現の點も、常に新らしい試みを試みてゐられるらしい。最近氏の句を纏めて讀んでゐないので、確信を以つて批評は出來ないが、琴人氏のあげられた句だけによつても、今迄の創作をもう一度鑑賞の狙上に上せて大いに教へられる所があると思ふ。

紋太——亂耽氏が雅拙と云はれたが、僕はそうは思はれない。寧ろ老巧な人が大膽に技巧に拘泥せず讀み下したと云つた感じがする。琴人氏の云はれた句の中で「憂鬱の君をめぐりて蠅一つ」「哲學がちびり〳〵と酒に溶け」等の句は非常に老練である。「からくりの交通巡査考案中」「夕雲の動きこの子は育つまい」の句などはちよつと眞似が出來ないと思ふ。

素人——句を通して、作家を見ると云ふ樣なことは餘程準備を要する事に不拘、突然に氏が狙上に昇つたので僕は何の準備もないために琴人氏がさきに引いた句と先月號の句によつて僅かに片鱗を覗ふに過ぎない。これに依つてみれば、閑生君は非常に世慣れた人で、可なり思想的にも深味を持つて居られる樣に思はれるが、やゝ川柳を弄んで居られる樣な傾向がありはしないかと思はれる。殊にこの句及び「火ありて土瓶掛けたり卸したり」等に至つては、餘程危險であると思はれるつまり(二)の句の「妻老けて見え若く見え」に於ては「若く」と「老けて」、五月號の「れえさん」の句でも「れえさん」と「おつかさん」「火ありて」の句では「掛けたり」「卸したり」と云つた樣な事に興味を持つて居られるとすれば、非常に惜しいと思ふ。危險だと云ふ所以はそうなんです。

琴人——今素人氏が云はれた危險と云ふ所は川柳的常套手段の對句の形式で、それが氏の句には殊に多く見受けられる。それをいふのであらふ。

紋太——これは川柳として、よく用ひられる形式であるが、これが必ずしも悪い形式であると僕は思はないが、同じ形式を、同じ人が無暗に使ふと云ふ事は、その人の句境が狹い事を曝露する譯である。從つてそれ等の句に平易さが伴ふために、自然句が粗末になる。それは必ず作者として避けたいものと思ふ。

素人——僕の危險と云つたのは、直ちに悪いと云ふ意味ではない。こう云ふ對句と云つた樣な未技に興味を持たれると云ふ事が危險なのでもう一皮剝げば狂句に墮すると云ふのであります。

町二——先程技巧云々と云ふお話があつたが、氏は表現形式を第一義とする基點に立つて而も技巧臭さゝを嫌ふ作家であるらしい。氏が、巧いと思ふ作家は石竹君だと云はれたのを覺えてゐる。(此時ひろし氏出席)

八木毒仙

1 北風もものかは乳房ふくませる
2 お伊勢詣りもせずにみまかる
3 オヂちやんとはつきり呼ばれ胸疼く
4 その船の荷を減すどこか石を積み

亡妻
二女に殺る
再婚

亂耽——毒仙氏の句として自分の今記憶に殘つて居るのは次のやうなものである。參考に並べて見やう。(此時山雨樓氏出席)

貧乏と知つてか子供死んで出來

才藏の藥貰ひに太夫ゆき
禁酒した頃が不思議な酒の味
春雨や女給揮發油を買ひにくる
分別を借せとはうまくもたれ込み
債券屋近頃ドダイ目がかすみ
歎けとて姫才色の高かりき

山雨樓——毒仙氏が再び句を見せて呉れられた時に、自分は非常に嬉しく思ひました。糸屋町支部のリーダーとして源坊氏や舟々氏と共に同氏が活躍されて居た當時のことを思ふと、此の人達が決して川柳を忘れる人ではないと云ふ事を信じて居たのであるが昨年夏天王寺動物園で納涼句會の際に出席されて秀句を澤山見せられた時にも、其後の川柳的精進を期待して止まなかつたものである。一休川柳に熱心な人が一時中斷すると云ふ事實はものの反動と云つたやうな休息とも見らるゝのであるが其の休息を善用して再び舊に倍した熱と精進を呼び起すならば休息必らずしも無駄にならないだらうと思ふ。

ひろし——毒仙氏は休息をして居た譯ではないと思ひます。唯句會に來なかつたり、投句しないことが川柳を休んで居る事になるならばそうであるが私は川柳は句會に行つて作つたり投句をしたりする爲めにのみに作る事が川柳ではなく他にもつと本當のものの生れて來る川柳があると思ふ。一句も作らなくても其人が川柳家であるならば、私は其人を川柳詩人と思ひたい。紙や口にしない

川柳があると云ふやうな事を 此の頃云つて見たくなつて居ます。まあこれが私の此の頃の氣持であります。

紋太 ― 僕もそうです。

素人 ― これは怠け者の云ふことです――一同洪笑 ― 僕も近頃怠けて居る爲めに口先では そんなことを云ひたいと思ひますがひろし君の奮起をうながします。

紋太 ― 僕は口だけではないのです。今迄の川柳界なるものは半年計り 句會に出ないと直ぐに「元川柳家」なんと云つたものです。それでは餘りに狹いではありませんか。

山雨樓 ― ひろし氏の 云はれた言葉は考へ方としては一應尤もであるが、物事は理論と實際は必ずしも同一步調に行かない如く、句會への足が遠くなる 投句を度々休んで居ると川柳への熱が冷めない迄も 興つて來る氣遣はないやうに思ふ。それから紙や言葉を持たぬ川柳と云ふ事を言はれたが、此れも頭の中では考へられるけれ共 實際問題としては悲しい事實である。川柳が詩と云ふ文學である以上 其文學の形式を踏んで現はれたものでなければ藝術としての鑑賞を求める事は出來ない。川柳は言葉を通じてのみ他人の鑑賞を要求出來るのである。

兎に角作家として 句作を中斷すると云ふ事は少くとも 川柳への高い熱を示すものではないと思ふ。けれ共赤仙氏がかなり長い間の休息を破つて近作柳樽欄に再び見えた事は川柳愛への甦生である事を喜ばしく思ひ、且つ今後も嘗に倍した活躍を祈つて止まない。

素人 ― 私は近頃怠まけて居ると 申しました言葉と矛盾するやうでありますが 私は川柳を片時も忘れた事はない 已而ならず素晴らしい句を生み出さうとする 努力を欠いた事はないにも不拘 近頃は一句も句が出來ないのであります。此れ等は決して川柳から離れて居るのではないのでありますが 何うする事も出來ない事實なのであります。議論が横道へ入つて行くやうでありますから この邊でブレーキをかけます。

紋太 ― それでは句に立戻りまして 亂耽氏の御記憶によります句と 今回の句とを味つて見ると以前の句はうまいと云ふ 言葉に盡きると思ひます。今回の句は夫れに深みと眞實味を加へて來たと云ふ事を感じます。

琴人 ― 其説には同感です。

紋太 ― 一の句は 強い母性愛の力をはつきりと感じます。四の句も柔かに出て實は深い暗示を與へて呉れます。

山雨樓 ― 今紋太さんが言はれた 赤仙氏の前の句はうまいと云ふ事については 僕も同感であります。併し一の句については そんなに深いものを見付けて居るやうには 思はないが「母性愛云々と云ふ見方も 此の句から受取る理解の範圍を出て居ないやうに思ふ。其れから四の句 此の句は成程意味のある叙法を採つて居るが 其れも寓意的な理解を求めて居る程度ではないと思ふ。兎に角句の深みと云ふ處迄は 此の四句を以つてしては 斷じ難いやうである だが作家として自分の句をよく云はれない場合は かなり腹の立つものである 赤仙氏の句については 先年此の月評會で僕の不滿を述べた筈だが 今又甦生の同氏についてこの苦言を呈する事は 甚だ不愉快な感じを與へる事と思ふが同君 將來の奮起を望めばこそ敢て 以上の言葉を申上げた次第であります。

琴人 ― 一の句が 母性愛を理解する範圍を出ないと云ふお説であつた。この句から母性愛を理解しなかつたならば、この川柳の價値は何處に發見してよいか 分らなくなると思ふ。それは母性愛の見方考へ方にもよらうが 僕としては その意味でこの句は四句の內で優れて居ると思ふ。

紋太 ― 母性の持つ力を作者が しみ〴〵と感じて居られる事に 私も同感させられたのです。此の句を批評するのに此の頃使はれて居る母性愛と云ふ言葉だけでは ちつと輕過ぎると思ふやうです。

素人 ― 一の句が 大變問題になつて居りますが理屈抜きで私の感じから行きますと「北風ももの かは」の「ものかは」が母親の愛を表現するには 少しく妥當を欠いてはしないかと思ひます。つまり「ものかは」と云ふ意味ではなく つまり音響が 災ひをして居るのではないかと思ふ。これを母性愛のにじみ出て居ると云ふ見方は「ものかは」と云ふ誇張に重點を置かれて居るやうである。と同時に反感を持たれる所以も此の「ものかは」にあるのではないかと思はれます。「ものかは」に替るもつと適切な言葉がないでせうか。

ひろし ― 「ものかは」と言つて居るのであるから 乳房を含ませて居るのが溫い部屋ではあるまい。よいとまけの女等が寒風にさらされ乍ら 泣く背なの兒に乳を含ませてやるやうな凄慘な光景を 詠まうとしたのではあるまいか。

琴人 ― 「ものかは」が問題になつた。此の言葉があつて 初めて深刻な母の熱愛が受とれる。

亂耽 ― デッサン川柳ですね ― バルガーの句ひ高い句だ。（五月六日愚陀、杏三筆記）

近作柳樽

ひろし選

花菜風もう借金のない男　近江　たけし
良縁なりし膝の糸屑　同　同

煙突男に

世を終るまで煤煙の奴隷なり　同　同
玩具屋の前は死んだ子思ふこと　香川　三汀
筆持てば筆の冷たい春の宵　同　同

鹽の江温泉にて

鹽の江の灯りへ河鹿呼びかける　同　同
本當の言葉がのどでつまつた　島根　麗亜
春や春草履に砂のサラサラこと　同　同

C子へ

頬の涙をふいて月が美しい　同　同
ごこへでも行くこと極めてる丙午　郡山　右月
金こ暇それが博士になる要素　同　同
あくびの口に入れ歯がおごるよ　大阪　水車
ざるそばで濟ます課長の油ぎり　同　同
二十二の眼で見た春の娘の子　螢ヶ池　晴夫

選後感想

▽たけし君の「花菜風」は朗らかな句だ。「良縁なりし」は嬉しそうである。若き夫と新妻の樂しそうな生活が覗はれる。「煙突男」は尖端的取材だが深い思索をもつてゐらないからたゞそれだけのものに終つて居る。

▽三灯君の「玩具屋」は見付どころではあるが、もつと哀切な叙法を用ふべきではあるまいか。「筆持てば」春宵の感じはあるが平凡。「鹽の江温泉」の句は氣分だけは味はへるが、「呼びかける」が河鹿のもつ情味をこはして居ると思ふ。

▽麗亜君の句、今號のものはいつもより感心しない。「本當の」ももの足らないし、「春や春」はリズムだけのもので、陳腐を免がれぬ。「C子へ」もわりに感激が薄いと思ふ。

▽右月君の「丙午」は月並。「金と暇」は確に皮肉ではあるが、皮肉な觀察は苦笑から一歩を出ぬと、理窟に終る。

▽水車君は非常に多數の投句をされてをるが規定嚴守してほしい。「あくび」はユーモア味がある。「ざるそば」は月並。

▽晴夫君の句には生々したものがあるが、練れてゐない。「二十二」は青春の惱みを出さうとする意圖はよくわかる。「はつきり」も若い女の心をみては居るが、どちらも燃燒不足である。

▽深太樓君の「土いぢり」は洋服と下駄といふとりあはせだけで感心しない。「味氣なさ」は亂れ髪では古い。もつとつつこんで觀察する事が必要だ。

▽葉光君の「眉剃る」は原句「まゆを剃る鏡へ

はつきり言へば嫌やらしいひこ　同　同
土いぢり洋服の子も下駄をはき　大連　深太樓
味氣なさ醉ひし女の亂れ髪　同　同
眉剃る鏡へ近くうぶ毛の光り　大阪　葉光
丸髷が光つて春の息をする　島根　草古
門からはなる程工塲奇麗です　大阪　童史
氣ちがひになれこいふかや櫻空　螢ヶ池　照夫
朗らかな空だ笑ひな娘さん　大阪　露行
戀を夢みし朝のたはけさ　大聖寺　白花子
花の春人も春だよ絹ショール　大阪　こも坊
背伸びして序に日めくり破るなり　高岡　かずま
宴會の歸りの父は老けて居ず　大阪　智惠子
自活する誇りのうれし二階借　羽衣　松枝
サイレンに服從をして働かう　大阪　卯三
夜櫻に僞り多き人の群　螢ヶ池　康夫
時計店一時に四時五時六時打ち　大阪　詩郎
姐さんの嘘をこりつぐ電話口　東京　佐保蘭
夢にだけなこ笑はせて呉れ　螢ヶ池　杜洋
髭も落し我を折つて書く履歴書　大阪　柳村
春の椽毛をかわかして女居る　神戸　詩弘
退院を夢にみたまゝ死んでゆき　螢ヶ池　田島
足袋ぬいで朝顔の種なごまかん　大阪　紅
男の子反抗的な愛を持ち　京都　司朗

近い」であつた

▽草古君の「丸髷」は大一番の派手なものが想像される。

▽童史君の「門から」は溫情主義工塲をたしかにやつつけて居る。生花も、茶の湯も或は娯樂室もありそうだが、搾取は續けられつゝある。

▽照夫君の「氣ちがひ」は、「いふかや」がすこし變にきこえると思ふ。

▽露行君の「朗らかな」は安易すぎはせぬか。

▽白花子君の「戀を」は原句「戀を夢みて朝のたわけさ」だつた。たはけさは此塲合馬鹿〳〵しさととるべきだと思ふ。

▽知惠子君の「宴會」のは女性らしい見方で、老い行く父の姿をよくみて居る佳句だ。

▽松枝君も職業婦人としての ほこらしさを正直に詠つて居る。

▽詩郎君の「時計店」は實景ならんも、事實そのものゝ面白味に過ぎない。

▽佐保蘭君は中々の多作家らしいが、以前のようないゝ句を見せてほしい。「姐さん」はあまりに川柳的で陳腐すぎはせぬか。

▽靖弘君の「春の椽」は春日遲々といふところ、女の膝に猫でも描けば少女雜誌の繪だ。

▽司朗君の「男の子」は男の子をよく見て居る。

▽青米君の「若樣」新柳君の「ハトポツポ」は共に感心しない傾向の句である。句をこしらへる事はいつでも一番いけない。まづくともほんとに感じた事。眞實な感激を表現するようつとめてほしい。（ひろし生）

その後の私

昨年のいま頃は麻雀に熱中して居た。朝起きると（といつても三越のサイレンが鳴つて

朝のベットへ工場の汽笛　　螢ヶ池　銀花
洗面へ昨日の醉がまだ殘り　　大阪　一久
あゝ迄も言はねばよかつた歸り道　　大和　白帝子
子を抱けばネクタイ派手になつてくる　　大阪　さだを
生きてゐる證據の熱こいはれけり　　螢ヶ池　百萬石
若樣の留守に女中は暇が出　　大阪　青米
月給の割合で出す二次會費　　鶴ノ莊　普天
櫻餅吾に遺して友は逝き　　大阪　愛緒

療友急死す

一切のパン枕邊に殘つてる　　螢ヶ池　鈍愚
御無沙汰を子供のせいにしてしまい　　大阪　一公
おだてゝおだてられてる世の表裏　　大寶寺　一寬
ハトポッポ豆をやるのに飛んで逃け　　大阪　新柳
童貞こ云ふ字も知らず死んで居る　　螢ヶ池　道人
ポマードはバゝのなりゃゝは洗い髪　　大阪　千里
施療院もう一足を待てず死に　　螢ヶ池　紅玉
傳明のやうな男の靴直し　　大阪　素月
初午や舞妓も春を袖に見せ　　長野　正司
親ながら我子の智恵をほめるなり　　大阪　靜香
緊縮に一錢の容へお愛想　　神戸　繁堂
オーライこ車掌合圖の戸を叩き　　大阪　青兒
三越で一日潰し束子だけ　　泉南　鯉友
人の氣も知らずか空は晴れて居る　　不祥　正子

から)すぐKビル地下室のクラブに駈けつけた。自動車賃がないと夜の一時頃テクテク歩いたものだ。月評會や句會の後ではK君とよく徹夜した。

十月末にK君の切なる勸あでいまのところに就職した。自由に暮らして居た私の事だから長くはつゞくまいと、試驗的に一月だけといふのでやつたのが、案外仕事に興味がもてるし、やりかけるとなんでも熱中したがる私の事だから、先方で斷らぬ限りは續きそうである。

そのときからK君のところに食客をして居たが、十二月はじめにベット生活とおわかれして、次はお醫者さんのM君ところでこの四月迄厄介になつた。御迷惑なルンペン食客である。M君から碁を敎はつて此頃は大いに碁熱を擧げて居る。やつと井目から六目までこぎつけた。

五月はじめに現在の築港に移つたが、當分は落ち着いて住みそうなので、萬よし居にあづけはなしだつた妻の寫眞も共に連れて行つた。

こんどは築港公園の近くでこの間うちはつゝじが奇麗に咲いて居た。大棧橋もすぐ近くに見える、潮湯にも行ける、空氣は澁んで居る。朝寢坊だつた私もこゝでは早く眼ざめる。九時には信濃橋の事務所に出かける。四時か五時には歸宅する。生活が規則正しくなると身心共に健全になる。久々に句あり。

妻待つ如く夕には歸り　　ひろし

（六、五、一八）

書名詠込みの古川柳

竹馬居主人

私が本誌に寄稿し始めたのは、いつからであつたか、一寸年を經て居る。其間兎も角一ケ月も休まず、誌上を穢がしたのであつたが、去四月號には編輯の御都合で、無緣のものとなつた。全くタッタ一回丈けであり、夫れも私の不勉強からではない。折柄又もや健康を害して居り加ふるにフトした事で、右手を傷き、漸く萬年筆を採つても、疼痛を覺ゆる不自由さで、諸方に好きな端書通信も缺禮して居る。只氣分に任かせ、お約束の原稿丈けの責は塞ぐ。此際私の本誌に對する氣分轉換のため、一年位の寄稿を休止しようかとも思慮しつつ、書棚の整理をして居るこ、川柳雜誌の昨年新春號が出てきて、揭題目の拙稿が、一回分載つて居る。ぞうして續けなかつたかは不明で、多分私の持病期であるから、中斷したのかもしれぬ。從つて當時用意した材料が今ごこに在るのか見出さぬ。

昭和四年五月の東朝紙の讀書欄に、得所飄氏が、書名を詠込むだ古句をホンノ僅少、發表せられたのに興味を買ひ、その夏書癪の時間に、やはり少し書抜いたもの、京誌に書名を詠込むだ作がないので、古人にはこんなものがあるこの、見本陳列の謂。これを本誌に照らすも亦、書名咏込み句は殆んごない。今日の尖端式川柳人には、そんな刺戟の乏しい業はお氣に召さぬ事も以て窺へる。茲にはお目障りにならぬ程度で、役に立つたぬは別問題こし暫く稿を續け、徐に靜養したい。

□句を澤山は列べない——柳多留も重なるにつれ狂句が出てくる。又本誌の主張は古句研究に存しないのだから、網羅するの必要は全然ない。

□分類らしない——漢書ごか歌集ごか區別順序立てれば體裁は好いのたけれご骨折り程の甲斐もなからう。

□說明註釋も、したりしなかつたり、氣儘の方が好い。たまには脫線して、氣

焔でも上げる氣力が欲しいと思ふ。

□一度に長稿にして發表した方が、讀書には好都合であるけれ共、前陳の如く材料紛失中ゆゑ、長くて二頁位の埋草に採用して頂く事にしよう。其方が隨分古句を蚯蚓視せらるるお方にも、御迷惑を與へずに濟む。

やがて私共は古句研究專門誌上、完全なものを發表する機會もあろうし、又此方面を特に研究してゐる同志もあるのだから、心強い期待も抱いて居る。

（4）四　書

今、中庸の句を記憶しないので、脫線する。大學論語孟子中庸を四書といふ。前二者は元と禮記にあつたもの、程顥程頤が後二書と併せて愛讀した。朱子に至つて、中庸章句一卷、大學章句一卷、論語集注十卷、孟子集注七卷が公にされ『京』誌上では、（一）論語、（二）孟子、（三）大學を既載した。故に便宜上番號は追つてゆく事にする。

世間の机上にされた。我國に於ては五山の僧を介し、朱子學の勃隆してより、專ら用ひられたのである。

中途にして四書などを實拂
本田天窓で今あきる四書をよみ
不審紙だらけな四書の拂物
やつと駕代さと四書の値ぶみする

こんな句許り列べると、川柳は所謂詩臭くなつてしまふ。

（5）七　書

序に記す

信玄は七書にひいで四書にもれ
生醉は七書にもれたはかりごと
明後日と言つて七書をよんでゐる

第三句は由井正雪。武經七書は、わが邦にては、慶長十一年飜刻す。武家俗說辯に

宋の元豐中、六韜、孫子、吳子、司馬法、黃石公三略、尉繚子、李衛公問對を以て、武學を頒ち行ひ、之れを習はしめ七書と號せしより、專ら天下の武人、此の書を講誦し、其蘊奧に熟達せん事を欲す。凡そ天下古今の兵書をあつめて、其の姓名の全きをとり、且意味深く理正しき書をえらんで、七書と號す。なんぞ容易ならんや……六韜は太公望の書にはあらず、後人の作なり三略は黃石公の作こいへる事不審、黃石老人こいふ者だに、其の出所しからず、然れば一向用ふるに足らざる書也なごこ口に任せてさへづりまはる、當時の儒者壯年の士を笑ひ戒めて居る事が記されてある。

（6）十三經

儒者のごら十三經をまづ拂ひ

周易、尙書、毛詩、周禮、儀禮、禮記、春秋左傳、春秋公羊傳、春秋穀梁傳、孝經、論語、孟子、爾雅。

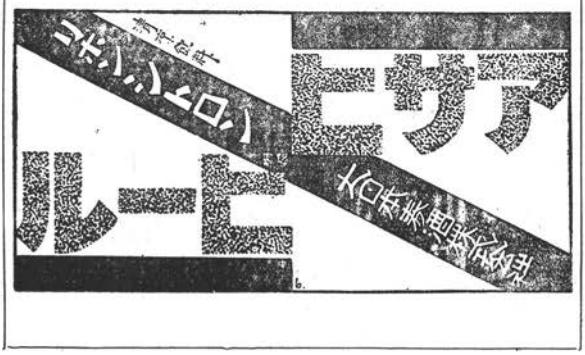
（7）孝　經

身を立て道を行ひ名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは孝の終なり、こあるのに

ごつと笑ひ孝經を茶屋でよみ

此書の作者には說がある、古文行文の二

種あつて、前者は僞書ならんこいはる、司馬温公が、孔子與曾子論孝、而門人筆之、謂之孝經、こ言へるを可なりこせんか。石川雅望の『しみのすみか物語』に昔かたなりこいへる、すまひ（相撲取）ありけり、明衡こいへる博士の家に行きて、『孝經論語のたぐひ、しばし貸したびてん』こいふ、明衡おごろきて『そこは近き頃田舍よりのぼりつれば、をさ〳〵見參にも入り侍らねば、こころざしも知り侍らざりしを、書借りいでて讀まんこあるこそ、都人にはまさりてありがたく覺ゆれ、世中の人うはべには、志あるやうにもてなすめれご、じちにこのめる人はいこ少く侍り、さて孝經論語なん注しつけたる書、まち〳〵にわかれて數おほく侍る孝經は御注にや、安國か傳は清和の帝仰せごこにて、ここにはをざ〳〵用ひざれご、讀まんこならば貸しまるらせん、論語はわうかんか疏こそをかしきものなれ、いづれをか』こいへば、かたなり餘りに褒めたてられて、まばゆき心地して、掻繕りていひけるは、『書を借りまるらするは、學問のためには侍らず、うるはしき文字を見つけて背中腕のあたりをゑり瞭して、人にはほこらばやこ思ひ侍るなり』こいへば明衡あきれて、すさまじげなるおももちしてやがて奥ざまに入りにけり(了)



讀者の聲

そろ〳〵若葉のなつかしい時候こなりました。皆樣には吾が川柳界の爲めに益々御努力下さいます事を嬉しく存じて居ります。漸進的に毎號の雜誌の發展ぶりには限り無い力強さを感じさせられます。特に私達の驚異こ喜悦を感じますのは前號より吾が柳誌の爲めに御執筆下さいまする、長野吉高先生の「柳の絮」です。非常に面白く且つ有益に拜讀して居ります。由來川柳雜誌には川柳人以外のこうした別の方の違つた角度から見られた人生の一部、つまり川柳のみでない小說こかいふ樣なものがあまり揭載されない傾向がありましたが久しく望んでゐた願が叶つて、こうした方面のものが拜見出來たのは何よりも嬉しく思つて居ります。恐らく他の皆々川柳人も同感であらうこ思つております。「柳の絮」は淡々たる筆致の中にいふ可らざる哲理こユーモラスこがあり、丁度彼のマークトエンス氏の諷刺小說を讀むやうな氣がいたします。吾か川柳雜誌に長野先生の小說を拜見出來ますのを悦ぶこ同時に、何卒毎號欠がさずに續いて出して下さるやうに御願ひいたします。よき「川柳句」こ共に次號の一日も早く出でんここを樂しんで待つて居ります。

光耀抄

葭乃選

守口　武子

夢の内京大阪は過ぎたらし
こんな家でも大阪は大阪
夕立に濡れて蒲團の面白し

大阪　壽枝女

お玩具ごもりてひよつこ買はれて來
道具付ゆずる店なる戸が閉り

京都にて（二句）

竹の子の匂ひに嵯峨は親しまれ
泊つても見たい御室の夕櫻
畫のラヂオ若葉の庭を流れて來
ほろ醉うて歸る良人のおもしろし

螢ケ池　紅蔦

ご の夢も皆小康の自分が居

入院第一日

妹こ話せぬベツト淋しがり

螢ケ池　伊勢子

病みついて丸四ケ年をむだにすぎ
溜池へ灯かげ淋しくゆれてゐる
近眼へ今日も悲しくほゝをそめ

螢ケ池　かつ美

強くなれ強くなれよこ胸をはり

螢ケ池　かず子

足駄はく心も輕く庭の土
腹巻をあみあげたけご大きすぎ
まのぬけた顔を眼鏡でおぎなつ

【地下鐵のつゞき】
この女房、あの女房

山本丹路

尊敬する先輩M氏に偶然ドンバルで會つて新婚早々の御感想を伺ふスポーツマンで多分にインテリ色彩を所有するM氏、盛に「女房が〳〵」を連發される。うんざりして失禮すると言へば「僕も歸るよ。早く歸らないと女房がれー」と仰言る。

愴惶と別れを告げて歸る途すがら、口中で「女房〳〵」と呟いてM氏の愛妻家ぶりに嬉しくなつてゐたのであるが、僕呟く處の「女房〳〵」は何うもM氏の「女房が〳〵」の感じにそぐはない。M氏の引締つた唇からころびでる「女房」は如何にも近代的な理智と感情と、そして健康な肢体のM氏令夫人を想はして餘りないのだが、僕呟く處の「女房」の感じは、どうも井戸端會議に喋々として餘念のない山の神臭味が濃厚である。

一日訪れた柳友にその話を持ち出すと、速座に答へて「君、古川柳の幽靈にとりつかれてゐるねんで—。君の言ふ「女房」は古川柳の「むなぐらの外に女房は手を知らず」「女房のちゑは花見に子を付ける」なんかの所謂講談倶樂部的川柳の世界にある「女房」の觀念さ

螢ヶ池　美和子

檢温を二度かけなほす今日の熱
療友と外出もしたい春が來た
病む身にも晴着の話しあれやこれ

螢ヶ池　あざみ

病床へ早く治れと朝陽さし
信心も忘れがちなる病みづかれ
家のこと尋ねて母に叱られる
うつかりとオハギへ藥呑み忘れ
モルモットになる時もある施療院

大阪　房子

スケートを母に預けてランニング
化粧する肩の蔭から首を出し
重そうな腹を抱へて妬き續け

大阪　富美子

あした雨とはラヂオ憎らしい
選手になつたのに母の不機嫌な
玉葱へ涙こぼれぬやうになり

深日　ナヲミ

君が名を砂へしるしてもごって來
忘れんと努めてゐるを夢に逢ひ
若き日を火華の如く送らんか

大阪　機見女

二軒こもきらしてる猫いらず
こればかしの狹さにものが無いと云ひ
故鄉におればもめづらしない胡瓜

神戸　茂もよ

こんなのもほしいと思ふ仕立物

住道　不路子

春の陽をせなかに浴びてしんし張
うらやましがられて暮らす差し向ひ
丸髷で二人で行けばひやかされ
ざしきから見れば れんげの花むしろ
エロのグロのと三面記事のにぎやさ
知らぬ間に頭に浸みこんでゐるんや」そして更に語氣を強めて「しや〳〵。やつぱり古川柳の幽靈にとりつかれてゐるんやー」

なる程と感心して早速川柳を些か解する僕の愛人を訪れた。「君、僕の女房になつてくれる？」そしたら「女房やなんていや。けど、あんたのマダムにならなつてあげるー」

こいつにも幽靈がとりついてゐる！

由來、僕、川柳家には、この恐怖すべき誤解を避けるために、且つ愛するマダムのために「女房」なる愛稱を斷じて使用せぬことに、今から決心してゐる。

埋め草

素人生

自動車をやり過ごして置いてから道を横切つてやらうと思つて、つつ立つてゐるとその車が僕の傍で徐行しやがる。そして窓から指を五本出して「どうです」とぬかす。こちらは車の行き過ぎるのを待つてゐるのだが、むかうはタクシーの空車だから、自動車に乘るので行つてゐるだと感違ひをしたのだ。人々は自分の立ち場に依つて、ものの事がそれぞれ違つた意味を以て映じるものだ。洋服ブロの僕の川柳とタクシイの助手の川柳とが違ふ譯。

撫柳談

阿部閑生

川柳は戀であります、ひごりよがりよりも二人よがりの方が宜しい、少くとも作者こ讀者こ。

極めて神經質な一人が珍らしくトップを切つた。

×

川柳は酒である、最うすつかり廢めたこ云つて居るかこ思ふこ、知らぬ間に亦ほつ〳〵こ初めてゐる。こ是は自分だけの事をさも川柳を作る人は皆然うであるが如き顏付をしたのだつた。少時間を置いて。

×

酒でも戀でもない、川柳は井戸だな、深く掘り下げれば掘り下げる程澄んだ水が湧き出す、脈筋を研究してかゝれば淺く掘つても澄んだ水が湧き出す場合がある、こ痩せたのが冷やかに云ひすました

×

智慧で川柳を作るのは、牛が針の穴を通るのより難しいですか、この問ひが唐突に起つたが誰も答へない。

×

いや、川柳は鏡だこ思ふ、表面を磨くほご確實性を發揮する、近づけば浮んで映り、遠ざかれば沈んで映る、か。磨くのが肝腎だ。

×

何の那樣ものではない、私の見る所では川柳は嘴ですよ、人怖ぢの眼をきよこつかせながら、大地にこぼれてゐる眞理の一粒々々を根氣よく啄むなごね。

×

川柳は蛹ちやありませんか、頭こも尻こもなく至極むくつけき形をしては居ますが、讀者の胸へ喰ひ入るこ、忽ち脫化してへんぼんこ舞ひます。

×

大方は舞はないね、こ吐き出す樣に一言云つて厚い唇を結んだのに對つて、鳥渡不平らしい眼を向けたのが、あなた今までにお笑ひになつた事が何度ありますか、こ眞顏で叮嚀に訊いたので、聞かれた以外の者が皆くす〳〵笑ひ出した。

×

けれごもね、川柳は亦狐でもありませう、苦心捻作して是こそこ信じ切つて居るのが闇から闇へ葬られて、序に出來た無造作なのが意外に推賞されます、斯う

して一二度は必ず正面から欺されたのが川柳作者こ云ふんぢやないですか。

×

うん然うだ、そして川柳は亦神童でもあるんだよ、時に白い歯を見せて産みの親を嘲笑する。

×

神童つて奴は駄目だ、請ふ見よ他年學成るの後、才子才ならず愚も愚ならず、こ云ふ事を知つてるかい、こ常識家らしいのがきつく脫線して了つた。

×

最後に川柳はらつきよですかね、こ隅の方でにや〳〵して居たのが、來がけに辭書を引いてきたこ云つて、薤こ云ふ字をきやしやな指で書いて見せた。

●●●●

らつきよは一年二年三年こたん〳〵形が小さくなり、小さいもの程重寶がられます、猿にらつきよを與へるこ、忙がしく皮を剝いて、次第に皮を去り型を無くするこ、最後に味はふべき何も殘らないのに呆然こします、こ云つて、その何の點が川柳だこも明言せずに一同を平らに見廻して、にや〳〵こしたり顏をした。

×

その後はしんこして何こも發言すえ人がない。

勿論皆目開きのこだから、あの、尻尾を握りしめたまゝて『象は繩だ』こ云つたりそれから腹のあたりを頻りに撫でながら『象は壁だ』こ叫んだり、脚にしつかこ抱き付いて『いや〳〵象はこの通り柱ぢやないか』こ見えない眼を見張つた盲人達のやうに、左樣に天才的に要領は得なかつたが、それでも川柳は生活だこか、川柳は人間だこか云ふやうな者がるなかつたゞけは誠に幸福であつた。

ナマリ

竹馬居主人

五月號本誌の拙稿中「南嶺子」を引照し、人蔘にナマリを鑄込むだ事實を陳べた。

人蔘のナマリしたたか後家はもち　（川傍柳初）

それに關し、尙ほ參考となるべき、左錄の一節を、醫博長谷川一徹先生から、御通報を蒙つた。茲に感謝の意を表する。（五月八日）

柴田正筠著日用藥品考（文化七年）今渡るものに產、單參と呼ものの二品あり、產、根の形圓して扁ならず枝あるものも糊にて粘す根の末寸餘上へまげて亦糊で粘す根の大、見ゆる爲なり、是を「マガリデ」又「シマリデ」又「エビデ」とも云此ふとき處に必ず鉛を多く入る、本邦にて堅に皮をさきて其鉛をぬきたるあり又蘆顱をさし入たるもあり自然の蘆顱のものを眞とす。

一路集

（募集句）

笛

竹内多聞選

もう笛が吹けるこ親は手を叩き　佐保蘭
トンネルへ是からこいふ笛が鳴り　紅
本當の顔が尺八吹いてゐる　有爲郎
この月に寢るには惜いい笛を吹き　菊路
その當座口笛吹いて歸つて來　ナチミ
聞き覺へある口笛に外へ出る　不路子
笛吹けご淋しさのなほ去らず　千草
町外から口笛になる天氣水馬　忠彌
池堤逢ふ約束の笛がなり鶴郎　禮二
病身の死ぬこも知らず笛を吹き　ぎさん
笛一つ工場の人が吐き出され　清光
愛笛に孤獨の俺をハッキリこ　洋々
柴笛に麥の穗先の實るここ　いわを
新妻の口笛のなるうらゝかさ　柳次
氣が付けば口笛吹いてゐる子供一人　將吉郎
笛の主こは思はれずやせてゐる　浮大盡
單調な神樂の笛にぬかづきぬ　松波
サイレンへ滅法腹は空いてゐる　吐句坊
奇可愛
三助の笛を吹くこは思はれず　佐保蘭
滿身の力を笛の音につゞけ　千里
道頓堀の夢口笛で歸るなり　雄花坊
その痛手慰める氣の笛を吹き　忠彌
嬉しさがつひ口笛に出てしまひ　禮二
それつきりの事とは知らず汽車の笛　ぎさん
サイレンに萬事休した三對二　凡々
口笛の合つた散歩の麗かさ　虹一
紡績の笛になじめぬ理想なり　日日城
子供にも春は春なり草の笛　鯉友
幼稚園又警笛に千切られる　司郎
ルンペンの笛を斷る術もなし　木偶人
童貞であつて口笛朗かに　葉光
夕納涼一曲吹いて惜しがらせ　右月
辨當はつめたし書の笛をきゝ　方眠
揶つてやれ口笛ばかし吹いて居る　夢裡
入港を迷ふてるやうな汽笛なり　愛緒
寢轉んで口笛吹いたころの丘　三汀

續川柳家の戸籍調

◎係　山雨樓

（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤務先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）嫌ひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（262）　河柳雨吉

（一）赤塚時男（二）河柳雨吉、其他二三あり（三）東京市神田區（四）東京市淺草區福井町二ノ四（五）明治三十五年十二月一日（六）浴衣地商、七澤山ありますが、私共都柳壇から最近の句を拔けば、春風に轉がつて行く筆のさや　成次郎　駈てたがやがて歩いた河向ふ、太郎丸　森閑こ吹く風のある春の隙、雀郎（八）欠伸さへやつこ身になる幌のうち（九）河童の研究、最近は二十六字詩の改造を思ひたち同志の者奮闘中。（十）目下のこころ自由な天地を與へられてゐず。（十一）江戸趣味。（十二）大正三年頃。

（263）　日野華水

（一）日野義郎（二）華水（三）神戸市（四）神戸市中山手通七丁目十六ノ七（五）明治卅八年十一月十九日生（六）無し（七）ピアノが鳴つた金借りに行け（路郎師）長命の相

笛の主その日も窓の下に立ち　一久
公休の寢呆け眞晝の笛が鳴り　涼哉
軒並を獅子舞無駄を吹いて來る　艸樂
野にひとり芝笛吹いてゐたりけり　靈壺
十二時の笛へ工場息をつき　沙門
又一人命を絶つた笛が鳴り　泉流
一笛で講堂式の顔になり　相界
尺八の調子づいたる首を振り　ごぶ六
笛吹いて見る悲しさに一人ゐる　杜洋
雜沓へ顎紐かけて笛吹いて　おさむ
見送りと同じ心で聞く汽笛　沐天
女の子口笛吹いて叱られる　無鬼
笙の笛押戴いたやうに吹き　同
幸福な家だと思ふ笛をきゝ　明珠
口笛はもう吾家まで來てしまゐ　同
口笛へ犬から先に顔を見せ　黑犬子
未生流笛の音色も流れて來　同
ワンタン屋御世辭のやうに一つ吹き　百萬石
水鏡フト口を笛吹いて見る　同
たゞならぬ氣笛に窓を明けて見る　夕鐘
三味大鼓笛も吹かした遊び振り　同
淋しさに兄の明笛吹いて見る　素月
世に叛くラオ屋の笛の細いこと　同
待ち兼ねた汽笛で工場晝となり　憲坊
口笛で犬の道草呼び戻し　同
長唄の笛役お茶を飲んでゐる　練屋丁
祭笛の稽古に春の氣が流れ　同
明笛の流れへ月見草が搖れ　奈緒美
口笛のリズムに足の合つてゐる　同

叱られる迄ゴム風船鳴りつゞけ　勝二
不具の兒の笛へ柳の芽が踊り　同
無口といふが口笛上手なり　あざみ
朝風呂へ口笛吹くも日曜日　同
口笛も吹いて嘘言ふ女なり　英賀夫
晝の笛はつきり聞いて腹が減り　同
口笛を寂しむ目にも葱坊主　光路
正午を聞く洗濯の手がハタと止み　同
しゝの出る時分飴屋の笛が來た　十三絃堂
兒を抱いて表ての笛に逢ひに行き　同
口笛へ別莊の塀のつゞくなり　裸人
笛が鳴る〳〵阪をすつかり上りつめ　同
呼ばれたる按摩笛吹く手をとられ　沒食子
うた口にちと興奮の唇をあて　同
生意氣に口笛吹いて尋常科　虚白
ゴーハストプ、ピリリッと持つ權威　同
レフリーの笛反則を見免がさず　同
集會の笛にうれしいピクニック　哲郎
眞裏手の線路で非常汽笛鳴る　同
船の汽笛にエキゾチックな夜の神戸　同
あさましさ玩具の笛を吹きくらべ　了念
伊勢神樂となりと同じ笛で來る　同
笛吹いて玩具屋を出る子の元氣　同

佳

療養所チト好い方は笛を吹き　四五麿
小蒸氣の笛臆病に鳴りつゞけ　白花子
口笛にエス間違つて飛んで來る　無角
好きだつた笛も玩具も入れてやり　桂枝
職工の足、足、足へ鳴る汽笛　沐天

ある男門を掃き(紋太)責任は重く袴の皺が出來(二南)(八)大掃除籐椅子暑いとこに居る。斷言へ念をおしてる眞の友(九)登山、スポーツ、音樂(一〇)無し(一一)責任觀のない人(一二)大正十五年六月。

(624)　石田沐天

(一)石田清次郎(二)沐天、青二路(三)堺市乳守。初湯は神戸市で使ふ(四)大阪市西區阿波座上通二ノ一九(五)明治參拾五年七月拾一日(六)結局は元の洋家具職工某デパート洋家具工場(七)バット級君も芝居をしてるのか、双六の泊り珈琲を入ませう、櫻は櫻僕は君君、路郎(八)古びたるものゝ一つに我が姿(九)所謂ニキビ文學を愛す(一〇)天涯の孤兒で何者もありませぬ(一一)成上り者根性と守錢奴(一二)昭和參年初旬頃?

(265)　藤木主税

(一)藤木税(二)主税、子供の頃雪翠と稱しましたが現在は使用しません(三)岡山縣久米郡大井東村宮部下(四)大阪市東淀川區十三西之町三丁目五五(五)明治三十五年十月四日(六)シイベル、ヘグナー商會主秘書(七)手ぶらで行けば子が泣いて居り。焔と言へば悲しきはマッチの火。子が出來て煙の中をひよろづきぬ。等々どちらかと言へばしんみりした句が好きらしいです。(八)自信はないのですが、人に何んとか言ほれた句、次を促す三味

口笛に犬も樂しい朝となり　青水
ワンタン屋自分の笛に親しめず　繁堂
羅宇仕替仕事のあつた笛が止め　ぶ六
警笛へ團參はぐれまるこする　相界
口笛の音に母親の氣は疲れ　無鬼
警笛を鶴嘴きかぬふりで退き　光路
寂しさは玩具の笛を姉が吹き　了念
口笛も吹ける女となつてゐる　双車
お土産の笛を吹いてる伊勢の宿　哲郎
雲雀笛吹いて卒業遊んで居　盧白
草笛の戀は果敢なし故郷を出　十三紗堂
もう歸る笛を知つてる社宅の子　英賀夫
宿題は出來ず口笛吹いてゐる　あざみ
近所の子みんな土産の笛を吹き　新水
街の朝汽笛に明けて恙なし　杜洋
汽笛とは別に爭議は續けられ　白帝子
口笛の節尖端の若さなり　耕民
思ふまゝ音を出す笛の顏になり　同

客

戀知りそめた明笛の穴　光路
笛の音の冷たきものよ蛇使ひ　杜洋
雨あがり笛の師匠と氣が揃ひ　民郎
ゴム人形泣かねばならぬ笛を持ち　おさむ

「笛」を選して

澤山寄つた人の笛を吹いて見ると　如何に自分の笛の音の悪いかゞ泌々判る。笛も澤山寄つて來た、應募者一〇八名御作品七〇三句何れも銘々御持寄りの笛で、月明の夜を皎々と吹奏する尺、明笛もあれば、お神樂の笛、玩具の笛、汽笛、サイレン、殊に多いのは戀の口笛、詩的な草笛、柴笛、麥笛、職業意識ではワンタンの笛やら按摩の笛、羅宇仕替までが陳列され新しいのにはゴーストップの笛も出てゐる。變つたところでは鹿笛もある。古きは牛若丸、新羅三郎、袴無なども引つつけて出品されてゐるもの〻何といつても「笛」の句には口笛が一番川柳味があるとしてか數多く取扱つてゐらる〻、夫れも自分が吹いて相手を誘き出すか誘き出されるか、今少しこみ入つたところまで「口笛」を書がものにして貰ひ度いが、經驗の無い加減か實感が伴はずして客觀的に口笛を吹いてゐるのが相當に多い。偶に口笛を吹けば犬と遊んだり、憂鬱を忘れるためのものであつたりして人生の意義深く口笛を已れのものとしてゐないのが多い。句の切實な感を呼び起すものには血の泌むやうな、生味の生活を取扱つたものに始めて力ある句が生れ、夫れが他を動かし、自分も句の姿として表現し得たうれしさを感ずるに違ひない。一本の笛でも已れの子供が棺の中に入れてやつた体驗のある人があるならば「笛」の題目を見るなり忘れんとして忘れ得ざる當時の悲痛事をすなほな僞らぬ氣持で案ずるに違ない。この作品は必ずや大きな重さをもつて生れるに相違ない。七百本からの笛の中には煤けたのもあり、破れたのもあり、中には皆目フーともピーともならぬのもある、然れども艶かにして諧口一度濕せば朗々の調を發する見事な笛も澤山ある。春のうらゝかさみんな蓮の上にプチあけて一本狐入念に吹いて覗いて見ました。たの無駄撥。孤兒の寢ころんでゐる春の草(九)テニス、ピンポン、歌留多、將棋、まだ〳〵あります。(一〇)有り子供男女二名(一一)酒落の解らぬ人、西洋かぶれの人、他人の趣味をかれこれ論ずる人。(一二)大正六年頃から氣をつけて見る樣になり作句しかけたのは昭和四年二月頃からです新米です。

(266)　下田のぼる

(一)下田昇一(二)のぼる、別號は持合せて居りません(三)大阪市(四)天王寺區北日東町七番地(五)明治卅九年九月一日、ぎうも知られ度くないのですが止むを得ません、震災紀念日です(六)袋物屋です(七)餘りに多いのでお答に困りますが最近特に良いと感じましたのは「薄情が世のならはしか小雨する」溪花坊先生作、この句を一讀する時私は身がしまるように思へてなりません(八)不幸にして今日に到る迄自信と言ふ程の句が出來ませんたゞ好きだと思ふ程度で「醉ひしれて東山區の土を踏む」此一句です、どうぞお笑ひ下さい(九)深くはありませんが何にでも趣味の持てる便利な人間です。(一〇)もう暫く一人で居る心算です(一一)總ての事に嫌ひなものゝ無い幸ひな男です(一二)大正十三年夏頃からで本格的に始めましたのは溪花坊先生選に依る大阪都新聞の柳壇、それは同年の秋で爾來同先生の御教導を受て今日に到りました。

〃夜店の代ものをひねくるやうにつくもつてやつたのではありませんが中には「人が來たら蛙になれよ冷し瓜」で蛙になつてゐるの

梯子

梯子酒晩酌のあとをもめて居り　柳村
梯子酒銅錢ばかり置いて行き　あざみ
屋根の子を叱つて梯子持つてやり　掉二
段梯子ハラ〳〵させて子が上り　新柳
大原女の梯子へ峠晴れ切つて　沐天
大原女の頭へ梯子素直なり　菊路
ごてら着て梯子を登る日曜日　素月
公休日父は梯子を借りてくる　新水
もう一度ふみしめて見る繩梯子　吐句坊
繩梯子へちまのやうにぶら下り　暢山
繩梯子登つて見せる水夫長　朋璃
出初式梯子は寒むう延び　哲郎
段梯子も一人下りる音になり　禮二
段梯子足音知りて座り替え　鯉友
合格に足百高く梯子だん　かつ美
云ふだけは言ふ梯子を派手に踏み　黑天子
植木屋の梯子へ五月晴れてゐる　佐保蘭
葉刈する梯子へ父の危なかし　夕鐘
段梯子もう今日までをふきつし　明珠
兄弟子は梯子の上で塗つてゐる　英賀夫
盜まれて寒の梯子へみんなより　鶴郎
長梯子一段づゝの氣の締り　無鬼
折れそうな梯子に屋根の高いこと　おさむ
うどん屋は梯子段から金を取り　四五麿
もあるかも知れず、夫れを見抜く丈けの眼力の無いものであることが大きなことの言えぬ悲しさである。（了）

松盛琴人選

金槌やのこ梯子の上の人　方眠
左官もう梯子をしまふ灯がともり　石月
用心が悪るいと梯子こかしてる　憲坊
叮嚀にやれと家主は梯子へ來　紅
梯子上るにふと猿に似し　巧笑
鐵梯子上れば續くバルコニー　詩郎
鰯賣ふ女房へ梯子下りてくる　沒食子
しわむだけしわむ梯子へ身をのけ　湖山
繪看板をちよろい梯子の上で描き　裸人
借り梯子女ついでの用を言ひ　青水
火の見梯子に風の出でたる　双車
梯子の上で使はれてゐる　日日城
梯子と二階と今日の日本晴　相界
一着は梯子器用に扱けよつた　同
眞直な梯子煙突こけそうな　司郎
癇癪は棟領に梯子登らせる　同
(佳)閑人は何をする氣か梯子立て　かずま
(佳)梯子かけて見れば雀の巢の温み　千草
(佳)梯子から後妻の見榮をさがり　民郎
(佳)ぬけて出る梯子へ素足白せる　勝二
(佳)段梯子覗かれそうに二人なる　今雨
(佳)老体をはつきり見せる梯子段　機見女
(佳)梯子終ふてけふの日給　光路
(佳)午餉にする梯子手から降りてる　同

杭全町 MEMO 綠雨

▼五月十日の夜、事務所樓上で社友同人會懇談の夕を開き、その席上で社務に關する重要事項の協議をいたしました。その時左の五名の共選選者が箇人選者に推薦されることになりました。

長崎柳秀君、長谷川一徹君、阿部閑生君、安西杏三君、中澤濁水君

又左記二名は新に共選選者として推薦されました。

中島鐵洲君、關本雅幽君

▼川村花菱君が本社六厘坊忌に出席されましたので、當夜散會後道頓堀の柴藤で歡迎宴會を催しました。出席者路郎先生、萬よし、琴人、かほる、愚陀、鶴峰、久郎の諸君と私

▼岡崎桂枝君は本社の推薦により今回社友として入社されました。今後の活躍を祈ります。

▼伊藤綠之助君は五月上旬目出度結婚されました。

▼揭井二南君は毎晩好きな竹刀をかついで玉出市民館道場へ行かれるそうです、同君は劍道二段の腕前だそうです。

▼福田山雨樓君は五月二日祖母の一周忌法要のため鄉里岡山へ行かれました。左の句を寄せられました

「親しさは麥の中から國の人」

(人)つい裾を踏む春の夜の梯子段　三汀
評＝春の夜の若人の情緒を確乎を捉へてゐる集句中他に同想無き佳句と推賞す。
(地)巡業の梯子に託す命なり　青兒
評＝輕業を扱つたもの實に三十六句。輕業と云はぬ技巧に少しの無理もなく而して此句の裡には涙を唆る人生が有る、同吟中の白眉として頂戴した。
(天)梯子から苦樂に生る煙見へ　民郎

森

綠之助選

◇
夕燒の森兒供等も古巢です　司郎
森の池木の葉を乘せて動かない　いわを
出養生朝な夕なの森の息　百萬石
その森千古の謎を吸ひつくし　沐天
傳說があつて伐り殘された森三汀
炎天を森の靑さに救はれる　杜洋
森へゆく一本道のうねりやう　巧笑
森の木が春の陽光を奪ひ合ひ　榮壽坊
里歸りうれしい指で森をさし　日日城
じめ〳〵森の小道行くたのしみ　麗亟
馬ら午餉馬子も午餉なり森の中　方眠
森の道ぶきみな茸を見て通り　水馬
鐵路眞直ぐに森を貫いて　洋々
賑かに森は夜に入る夏祭　佐一郎
森の夢株につまづく戀だつた　民郎
背の子が見つけた森の一ッ星　奈緒美
ぬきん出た森の銀杏にたそがれる　湖山
森へ來て今來た道が白いなり　有爲郎

評＝句者はさうした人間の生活に深い同情を寄せる斯ふした感激は自己が過去に於ける尊き體驗で即ち現實の姿なのだ其現實の姿を捉へた所に作者の詩が成立した。併し此句は「高き屋にのぼりて見れば云々」の高津の宮にての御製より轉化したのではないかと幾度か味ふた上さうでないと信じて天位に頂戴した。

伊藤綠之助　友淵貴山　共選

森蔭に傳說のある塚が建ち　哲郎
一列に並び葬式森へ着き　裸人
森やがてお噺に殘るだろ　双車

佳作

旋回は鄕土の森を見つけたり　夕鐘
黃昏へ森を廻つて無事な戀　靑水
森へ來て泣けずに一人聞いた鳥　相界
春風よ森の周圍を吹くばかり　新水
沈默の偉大さ森で寒くなり　光路
ごつち向いても大木の威壓ぞ　麗亟
懸巢の小鳥鳴いてゐ森のうつろ　同
草鞋しを見よ峠の森に雲の湧く　同

貴山選

森彫の村に水車の廻る音　紅
傳說の森に祠が朽ちており　靑兒
掛聲で森を出て來るみこしなり　黑ン眸
ドライヴはいつもの森ときめられ　神谷
久方の故鄕の森も變りなし　かつ美

▼庄萬よし君は五月七日中國方面へ二日間演說に行かれました。金光町からの句に「ウルトラの辯へ百姓欠伸する」
▼藤岡櫻果君は五月三日鄕里の丹波大山金山公園へ行かれたそうです。
▼福田鶴峰君は五月六日京都へ、五月十六日奈良からの便りをうけました。
▼盤ヶ池支部幹事硏一流君茨木奈緒美君と交替されましたが一流君は從來通の御盡力下さる筈です。
▼山中溫泉(五月七日)の大火に同町川柳群聲社角出幾郎君外數名類燒の難に遇はれました同情に耐へません。
▼廣瀨無思君は四月廿二日目出度結婚されました、新妻は川柳愛好家でこれから二人で句作するとのこと。
▼牛窓屛三呂君は四月廿三日彦根から便りを寄せられ柳界に復活すると云つて來られました。
▼竹內機見女さんは奈良へ行かれて左の句を寄せられました。
「お友達ほど疲れぬ三笠山」
▼三條東洋鬼君は別府から左の句を寄せられました。「不孝者同志地獄の面白さ」
▼加藤文醉君の歡迎會、奉天川柳會、川柳群聲社、松山媛柳吟社から寄書を寄せられました。
▼川柳木曜の主催で北日本川柳大會を金澤の三越六階ホールで五月十七日正午から開催され短册の展覽並びに飯野桂園壽伯の外同人の短册揮毫などされて出席者は五十數

成功を森に誓つて國を出で　艸樂
日は麗らゝ我が森林の茂りを視　鯉友
明日天氣梟が森で啼いてゐる　清光
神秘なる森一飛にフオッカー機　洋々
霧の朝のりこは森を一ぱいに　水馬
森の中今も茸の出る話　夢裡
檢束の砂塵森へこ消えて行き　愛緒
朝霧の鎭守の森に鈴が鳴る　道人
追はれてる氣持でやつこ森をぬけ　町子
森一つある氣强さへ鳶が舞い　勝二
夕燒小やけ森に烏の子が啼いて　奈緒美
神鏡へ森の大きくうつるのみ　あざみ
孝行は森の怖さを言ふてゐず　英賀夫
くつきりこ月に浮んだ森凄し　柳次
森影の白き椿の思ひ出よ　司郎
あの森を抜けた所が嫁の里　憲坊
森の風一息入れる事にする　今雨
アマゾンの森へ打ち込む覇氣の鍬　泉流
靜けさの森にヒヨツコリ二人連　四五磨
赤い陽が森半分へ落ちかゝり　裸人
森を出た晝寢の腕の未だにぶく　民郎
傳說こ別に森林よく茂り　いわを
朽ち果てた末社へ森が伸びて山　相界
あの森を越せば戀しい人の村　不路子
馬子唄の高う森から朝こなり　沐天
セルを着た五月の森の人生よ　千里
懷しい森そのまゝに我を待ち　水車
森へゆく一本道のうねりやう　巧笑
森の靜寂にゆるゝ靈魂　靈壺
森の氣に過去の罪惡浮き出され　光路
魔の森もあつてアフリカ探險記　おさむ
丸い森神ましまさん姿なり　耕村
若葉して千古の森の薫るなり　桂枝

森の影永う十五夜お月さん　沒食子
子守唄森も一緒にうたつてゐ　凡々
森もあり戀は田舍でするものよ　素月
解決を森の神話になすりつけ　奇可愛
日の御旗たてゝ蕃舍の森靜か　十三絃堂
文鎭のやうに鎭守の森が見え　利生
陽のさゝぬ森に聖者の住ふらし　白花子
ごつち向いても大木の威壓ぞ　麗亟

佳句

森影に除隊迎ひの旗が見え　繁堂
森の椿の惜しい高さよ　機見女
にぎやかに森は夜に入る夏祭　佐一郎
黃昏に森を廻つて無事な戀　青水
神々しい森だ鳥居が見えて來た　雄花坊
森行けば唯か呼ぶよなこゝちする　一久
街の灯に彼女も森を忘れたる　双車
名を呼んで森の靜けさ破つて見　黑天子
出養生朝な夕なの森の息　百萬石
森の風天國の餘りかこ思ひ　沙門
黃昏の森へ不氣味に去ぬ烏　哲郎
森の綠に故鄕の空は晴れてゐる　新水
巡禮が眞白く抜ける森の中　佐保蘭
北斗星森へ斜に更けてゐる　湖山
たゞ一つ昔ながらの森であり　鐘生
森の木々春の陽ざしを奪ひあい　榮壽坊
こんもりこ墨繪のやうに森は濡れ　三汀
森に風あり家出する日に　明珠
副業の儲けを抱いて森をぬけ　沒食子
この森が相手のやうな國の音　青水
ありし日を森が語ってゐるやうだ　杜洋
傳說へ斧が立たない森の色　白帝子

名で盛會裡に散會されました、當日金澤柳壇の巨星窪田銀波樓、安川久流美の兩君の出席を見なかつたのは實に遺憾でした。

▼猫柳川柳社（石川縣）では五周年記念大會を六月上旬に催されるそうです。

▼社のために從來力を盡してゐられた熊本黃蛾、河野双車の二君が家事都合で去月限り退社されることになりました。一日も早く復活されんことを望んでゐます。

▼神戸支部の野口粹月君は四月廿五日逝去されました。哀悼の意を表します。

▼私は五月三日笠置山へ翌四日保津川下り六日螢ヶ池支部句會に出席、八日不朽洞へ十日拙宅で社友同人會、十四日晝は拙宅で偶會夜は編輯、十五日鄕里の不幸のため夜行で金澤へ、十七日北日本川柳大會に出席、葬儀に參列當夜の夜行で十八日朝歸阪、十八日夜編輯、廿日晝は浪花座へ觀劇夜は草々會川柳創立會に出席などでとても忙しい日を續けました。

▼本號の編輯は路郎先生、琴人、町二、素人、山雨樓と私とでいたしました。

轉居

安井ひろし君は（大阪市港區三條通二ノ二四へ）川上日車君は（滋賀縣石部町へ）川村觀月君は（大阪市西淀川區姫島町一七二四へ）内野桃水君は（神戸市東山町三丁目五三へ）加藤月天君は（東京市下谷區稻荷町九六へ）松並光哉君は（和歌山縣新宮町熊野地へ）

前號の正誤

（三頁）階段を昇る深夜の男かな　亂耽

川柳修業記

句 箋子

(一)

句會から得たもの

句會は初心者の練習道場だといふ。だが初心時代は誰も味はふ如く自分の句は全沒といふ憂目に度々逢はされる。僕もさうであつた。其都度自信は全く裏切られて遂ひ駄目だなと歎聲を漏した。そんな始末だから會場に席題でも張り出されると直ぐ胸がドキンとした。是は作句の心配が僕を脅迫するのだと考へた。それでは自然落つきを失ふ道理だから不可ないと氣がついたので、其後は席題が出ると先づ其課題が持つ性質を詮議したり種類を明かにしたり、特長や緣語、事象の生起等を腦裡に描いて思案する事に決めた。といふのは後句部をさういふ方法で追求してゐると、脅迫觀念を除外する事が出來るのと、深く思索してゐる内、或る鋭い一角を直感するから、初めは難かしいが馴れると易い。其意識されたものは卽ち題に對する資料（句材）であるから非常に都合がよい。それを緊乎りと捉えて何等のはからいなく其儘を輕く言ひ出る。而も内容は直感的に選ばれたもの故有効の樣であつた。斯く懸命に與へられた題の内容へ全精神を沒入してゆくと、自然外部との交渉が斷たれて騷々しい話聲や脅迫觀念などは消滅して終ふ。其處には落つきを生ずる。だが餘り案じ過ぎたり、上手に作らうとすると反つて想が亂れて遂に焦ら立つから勞して効無き結果を招く。だからいつも褌を締めて掛つたものだ。技巧や句品は練習次第に覺へ込んで來るから、初心の内は成るべく簡單明瞭に素直な句を仕立てるのが善いと思つた。此意味で僕は努めて寫生句を作つた。

句會吟の要領

異な言葉だがごうもそれがあるらしい、そいつを捕へて正體を見ると『印象明瞭な鋭角的の句ほど成績が良いから』それが句會吟の要領であらふ。例へば句の内容を積極的にうんと強く響かすので、詰り深刻な尖鋭な言葉を用ひて表現する、併し内容がゼロで言葉ばかり光つても駄目で、此際は作意も表現法もピタリと合つたものでなければならぬ。さうした方面へ努力を

つゞけると自然句に活氣を呈し迫力が加はり川柳の特長とするユーモア味も不知不識の内に織り込まれて來る利益がある樣に思つた。又多くは悲觀的に墮し易い課題なぞ出た時は、之を正反對に樂觀的に咏んで人の意表外に出るといふ方法もあると、或る先輩が僕に敎へてくれたが、これも程度の問題で、悔みに行き誠にお目出度うお次ぎは何誰で、なぞ言へば撲られる事受合だ。句會吟の要領と言つても、要領は要領だけのもので餘り骨折つて習ふには及ばぬものだと自問自答した。

古い習慣は禍ひ

僕は古い川柳が好きだつた。否古いも新しいもまだ知らぬ初心であつた。其好きな句といふのは、例へば

居候三杯目にはそつと出し
居候亭主の留守にし候

なごの句が非常に面白いと思つてゐた。

處がそれは川柳じや無いと言はれて吃驚した。それで理由を尋ねたら『川柳雜誌の句をよく味ひ給へ！そんな狂體句は一句だつて無い筈だ』と怖ろしく目を剝かれた。よく見ると成程それに違ひない。云ふ通り昔の句と今日の川柳とはお月さんと、すつぽんほど距りがあえ。それから川柳は詩だと云はれた時も目を白黑した。何故川柳が詩なんだか初心の僕には少しも分らないのだから併し尋ねて又先輩に頭ごなしにされるのが癪だから今度は一ツ自分の頭の皿の智惠を汲み出して味はつて見る事にした。處が僕の好んだ古川柳は娛樂的であり、文字の遊戲でしかない事が解つた。娛樂や遊戲は非文學で藝術でないと同樣詩ではないといふ事だつた。ハハアーンと僕は其時痛切に此黴捨てざる可からずと悟つた。併し人間の習性はなか〳〵改められない。算盤珠を持つて錢勘定をするより、散財してばらまく方が面白い。誠にすまぬ話だが事實はそんな氣持がして其黴から離れかねたもんだ。併しそれでは我身が浮かばれないから捨兒の詩の樣な氣持で、漸く古い奸みからぬけ出たのでした。

作句は落付いて

僕は或る句會で席題を八ツほど一時に出されおまけに締切時間が素的に早くて驚いた事がある。秒速一句三四秒といふ速さでないと間に合はぬ。尤も話に聞けば東京方面では十題十五題位ズラリと張り出し句數も無制限で締切も割合早いといふ事だ先づ競走吟といふものらしい。江戸ッ子は火事早いといふが達者なもんだと思つた。まるで競馬吟だ。すると作句者は何こか產の馬同樣なんだ。速度の早い馬は所謂達吟家だから達吟家へはハンデキャップが付くかどうか、それまでは知らぬ。兎に角僕は初心者だから大阪の句會に出て東京よりは寬大なものであるといふのに不拘面食つた。事實僕はそれまでは句會でばかり句を作り日常少しも練習をしなかつた。田舍者の僕が大膽をぬかれるも當然でした。こんな時はたゞ時間ばかりが氣になつて

句が纏まらぬ。頭の中はまるで時計の針かプロペラの如く廻轉するのみで顔から火が出る思ひをした。此時ほど作句は落付かねば駄目だと思つた事はない。場馴れるこいふ事もあるが、場馴れるこいふ事は少くとも或る期間修業を積んだ人で、初心の内はとても落付けない、それに懲りて其後は毎日十句五十句こいふ風に作句練習を試みた從つて落付も其方面からも得られた。

自分の句と人の句

句會で選者が披講する時澤山に良い句が朗吟される。僕は始めは自分の句が出るのをまだか〳〵と期待する事にばかり、心を奪はれて披講された句を能く聞取る事を閑却して居た。併しそれでは不可ないと、其後は努めて注意し一句でも聞漏らすまいと、披講の時は特に耳を兎の様に長くして聞いた。其お蔭で選者が二三句も讀み上げると、自分の句の拙さ加減がすぐ解る様になつた。これは即座に比較研究が出來るから大切な事と思つた。或時なぞ自惚が自分の拙い句を間違つて、扱かれはせぬかと怖れを抱いた事もある。併し拙い句は扱けない。選者は矢張り目があるなと感心した。まぐれ當りに三才なぞに這入つた時迂頂天になる事も禁物だと思つた。其後は必ず全滅が續くから……人によると句會吟なぞ下らぬものだこいふ人もあるが、全部がそんなものでない事も覺えた。熱心な人は當夜の三才佳吟を書取つてゐるのを見かけた。それほどでないと自分の句は上達しないと氣付いた。何も摸倣するのではない比較研究する爲めなので參考資料なのだからこうした方法もよいと思つた。

先輩の言葉

先輩の言葉は初心者には作句上のヒントを與へてくれるものである。僕は先輩の雜談にまで耳を傾けたもんだ。それがたゞ言葉ばかりでなく作句態度だつて教へられる處が澤山ある。今一寸した例を擧げて見れば、いつも會場の隅に居て目立たぬ方であつたが披講となると素晴らしい佳句として扱ける人が居た僕は遂に其人の名も覺えてしまつた。其後絶へず其方を注視してゐた。作句態度は定めて苦心慘憺たるものであらうと……處が決してさうでなかつた。席題が出ると何の苦慮する處も無く易々と作句してゐる熱心と云へば皆熱心にやつてるが、其方の如きは恰で水を打つた様に靜かに落着いて然もすら〳〵と句箋へ筆を走らせてゐる。袋の中の物を取出すやうに樂だ。實に其神技々には舌を卷いて驚いた。或時柳友に其事を話した。友もそれを知つてゐて曰く。彼の方は頭の中に小抽斗のたんこついた簞笥が有つて。題が出ると直ぐヨウテナこ注文通りの句を其抽斗から出して來るんだ。つまり斯ふした句は何番目の抽斗に在る。此句は此方の棚に在るこチャンこ覺えて只取出すだけの手數なんだ。だから彼の様にピョコ〳〵こ句が生れるんだ。我々は到底及ばぬ實によい頭を持つたもんだ彼の方の頭の皿には山

海の珍味が盛られてゐるんたが僕等の頭の皿は犬が奇麗に甜めた後の様になんにもない …と歎息した。左うだと抽斗も棚も持ち合はさず、頭の皿も空の僅等は一體どうすればいゝのだといふと、焼き直さねばとは心細い… 其様に先輩には達吟者が居る併し僕等は左うした先輩の中で揉まれる事はよい修業になる、悲観せず大に馬力をかけようと決心した、これは先輩の優れた技倆の方面であるが、其一言一句も相當初心者の僕等を導いてくれる。

例へば席題に「數布」なぞいふ題が課されたとする、此時の作句資料として、蚤だの南京虫、洗濯、汚點、干場、焼穴、等々は普通誰れでもすぐ氣付くもの從てそんな句は同想が多くなる、又過去によい句として云ひ盡されてゐる、だから其處いらをうろついてゐる句は凡句でしかなく、また同想類句の山積に選者をうんざりさせる事にもなる、依て沒にされる可能性を充分に持つてゐる、だから骨折損です、初心の内は仕方がないが、それでも充分心得ておくべきですと話された。

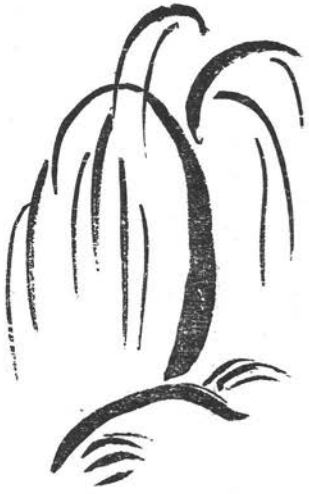
他流仕合の損益

少し川柳が出來るやうになると自惚が出る。自惚は毒にも薬にもなる、各所の句會で他流仕合するのも、そんな結果があるらしい僕は其少し出來る様になつたので他所の句會へ出たくなつた、東京の句會なら一ッ景品を全部浚つて來てやらふ……位の鼻息ですさまじいもんだ。併し會場へ着てズラリと並んだ先輩や見知らぬ顔ぶれの中に、俊寛然と座る時心細くもなる。初めヂヤヂヤ馬の如く終り 居所の羊の如く、勝手も違へば句風も違ひ、これまで直面目に作句に馴れたものが、急にカフエーの様に騒々しい會場へ來ては落着を失ふ、それでも川柳の修業の一ッだと理由づけて勇氣へ内々鞭ち加へて澄した顔でゐる、内心容易の仕事でない。斯くして屢々出かけた結果を綜合して考へると、どうも一利一害があるやうに思はれる。之をまたよく精算すると差引損が殘る事に氣付いた。それから二流三流所の小句會、集りといふものも川柳を研究するならどうかは知らぬが、たゞ作句して選を仕合ふだけでは遊びと同じで筈碁か、涼み將棋位の價値しか認められなかつた。何故そんな考へも起したかといふに、僕の様なまだ句境も定まらぬ初心者が斯ふした色々の句會へ出ると、切角素直に育ちかゝつた息子が、急に悪友とも交る様になり極道を覺えると同様だといふ事であつた。

例へば初心ではあるが一と筋に專念して一流を極めれば其處の道場の全部の秘術を譲られて、自分は立派な劍客者となれるそして自からの一流をも編み出す力量が出る。其時は他流仕合を一度もせずして他流の長所短所は見極められる。それと同じ理由で、何も知らぬ僕の様な川柳にかけ出しの初心者が、短時日に大家に成らふといふ野心?自惚?が手傳つて餘り諸方へ出入すると、色々の長所短所を覺え誠に利益のやうであるが、短所は比較的ごこの柳壇でも多分に持つてゐる。然も短所は覺へるには容易であるから、直ぐ染み易い、初めは白紙と美くしく眞紅に染めるつもりでゐても、之を黄だの藍だのの染料の中に打込んでは、目的の赤は得られず、黒き不透明の醜い代物が出來上る、だから一流に秀でた名句は生まれぬ様になる。併し器用さは並以上に成る事が出來よう。此器用といふ事も深く考へると害毒でもある。器用なるが故に名人になれなかつた人々は古來澤山ある。要するに自己の眞實な句は生む事が出來なくなる。此處を考へる時、初心の内に餘り諸方の句會へ出る事は結果に於て大さな自己の損失だとなる。自己を眞實に引伸ばすには、一二の句會で澤山であり、平素の研究が大切だと思つた。併し此心を以て諸方に出席する分には差支はなからふが、結果句會に追はれる事になるのを覺悟しなければならぬ。(以下次號)

各地柳壇

——いのちある句を創れ——



本社六厘坊忌句會

五月二日夜　於端の坊

セルの肌觸りに初夏の風が快いこの夕、恒例により六厘坊忌句會が催された。天才六厘坊が夭折してから既に二十三年、彼の殘した情熱は脈々として後進の川柳に傳へられつゝ今日の隆盛を築く活力素となつて生きてゐる。この日劇作家として令名ある本社客員川村花菱先生が御下阪を機さして態々御來會路郎先生の「六厘坊を想ふ」御講演のあと「武玉川の人間味」と題して約四十分に渉り有益にして興味ある御研究の一端を御講演下さつたことは、參會者一同の全く思ひがけぬ收穫であり喜びであつた。(町二記)

(出席者)路郎先生、花菱先生、綠雨、革郎、孚人、艸樂、奇可愛、双車、柳甫、鵜峰、恭郎、まさる、鮎美、靈壺、水車、公二、愛緒、山茶花、不路子、柳次、あや美、みつる、おさむ、忠彌、青兒、夢裡、主稅、白柳子、沐天、竹水、哲郎、明暗子、麥魚、夕鐘、亂耽、愚陀、山抱子、英賀夫、いわな、北人、かほる、秋月、突破坊、變人、京二、町二、山月、涎湖、青踏、葉平、さだを、嶺月、讓二太呼、里十九、久郎、萬よし、繁坊、一久、素月、

兼題　誘惑　路郎選

誘惑をされるきりように親が生みタイピストかくごをきめて入社す。　京二

誘惑の去年の祭を忘れ雜れ　不路子

誘惑に薄明りする窓をしめ　あや美

誘惑に勝ちて眠りし朝の呼吸　白柳子

慰めの言葉誘惑とも知らず　觀月

誘惑の前哨をする靴の先　いわな

誘惑も春の宵なら何とする　亂耽

誘惑に打ち勝つ下駄がちびてゐる　山抱子

誘惑を除けて律儀は子をあやし　嶺月

誘惑に勝つて冷たい五燭の灯　沐天

誘惑の手を振り切つて春寒し　柳次

誘惑の先づ一段の宿の風呂　哲郎

辨解を聞けば誘惑されたやう　變人

誘惑と氣のつく頃は孕んでゐ　双車

遲かつた母誘惑へ泣き崩れ　おさむ

誘惑に勝つて女教師二十八　明暗子

誘惑を恐れ患者へ不親切　奇可愛

肉体美その彈力に惱まされ　山月

誘惑をのがれ敷布の白さに寢　みつる

誘惑は別な世界をほめちぎり　孚人

素足の白さ色街は宵　壽枝女

誘惑の話そらせて倚りかゝり　公二

誘惑の話きいてたみづすまし　葉平

誘惑にひたすら親を盾にする　柳甫

もう何時頃と誘惑さばくなり　山抱子

信じきりたい言葉を夜々に聞かされ　主稅

かにかくに冷たき唇の忘られず　青踏

誘惑へポンチは金を出す氣なり　鵜峰

誘惑の袂の裏を出して見せ　山雨樓

誘惑に勝つて歸れば床の冷え　三碧

さだを

テーブルの下で約束出來上り　(佳)

赤い灯に誘惑されたのではなし　(佳)

誘惑に負けて居れない父母があり　(佳)

身におぼえあつて兄貴の照れてゐ　(佳)

誘惑もされず淋しく嫁つて老け　(佳)

微笑みながら誘惑をしりぞける　(佳)

待ちぼうけさす氣で輕い返事をし　(佳)

誘惑と氣付いたらしい變りかた　(佳)

白魚の指のぬくみも金だつた　(佳)

誘惑に勝つて歸れば壁が待ち　(佳)

誘惑に牛の歩みが目にとまり　(佳)

(佳)誘惑に揉まれくたじゆずなりし　艸樂
(佳)誘惑へ風はそよ〳〵吹いてゐる　かほる
(佳)春霞生きて居るのが患はし　さだを
(佳)お坊やうちねねどマダムの瞳が答ふ　山茶花
(佳)誘惑に打ち勝つ如き日本髪　嶺月
(佳)思ふまいあの眼あの髪あの言葉　革郎
(佳)灯を慕ふ虫の如くに來は來つれ　葉平
(佳)誘惑の罪は消へざり人の呼吸　鮎美
(佳)松竹座誘惑をして見たく出る　青踏
(佳)誘惑を母に明かしてよく眠り　萬よし
(佳)そのまゝに棄てる氣ながら封を切り　花菱

席題　藝人　かほる選

藝人のむつゝりとして家にゐる　町二
女おびえし旅藝人のくろめがね　愚陀
横町の風呂で藝人輕う脱ぎ　鶴峰
藝人が二人鹿爪らしくゐる　柳甫
終ひ風呂藝人らしい下駄があり　青路
藝人にちと小奇麗な小商ひ　山抱子
獨酌でゐる藝人の無口なり　哲郎
花見客めあてに親子流してゐ　泰郎
藝人の足どり遲し日は暮れて　秋月
藝人と藝人子を生んでゐる　いさを
どの店も藝人おことわりとあり　まさる
張り込んでやると串本節をやめ　おさむ
一と昔前を藝人醉うて言ふ　亂耽
藝人の姿で夜るの橋を越え　同
藝人の空ばつかりを案じて居　鮎美
藝人のよくしやべつてる風邪心地　同
山村の師匠に腕ををしがられ　麥魚
藝人の晝は無口な懷ろ手　同
お座敷へ出て藝人の年齢が知れ　さだを
藝人の内へ歸れば夜食が出　同
角帶をとつて藝人呑んで居る　同
タクシーがきらひ藝人俥で來　沐天
藝人の末の子供が左分け　同
藝人の外を女中が掃きたがり　同

席題　スリツパ　町二選

ベツトルームのきぬ〳〵のスリツパよ　愚陀
朝の廊下を戀のスリツパ　亂耽
朝の庭スリツパのまゝ下りて來る　不路子
スリツパと「土足無用」とだけの晝　涎湖
スリツパで行つて廻つて未だ廊下　双車
スリツパもはかず飛び込む手術室　變人
スリツパへあはてゝはならぬいきごほり　愛緒
青白い微笑を思つてつめたいスリツパをはく　青踏
スリツパの先に惱みのある男　明暗子
スリツパの先に引掛つた戀なりき　葉平
小兒科で子もスリツパをはきたがり　哲郎
應接間子はスリツパをばたつかせ　さだを
一等病舍へせはしくなつたスリツパ　山茶花
心地よきゴムスリツパも春に成り　同
スリツパの先き破れてる施療院　琴人
病室の危篤スリツパまいたやう　同
スリツパの默札をする人に會ひ　柳甫
借りて去ぬ日のスリツパを隅にぬぎ　同
スリツパへ女こまかく歩くなり　同
スリツパに今日もダラ幹身をのぜる　公二
パジヤマ着てスリツパ履いて妾なり　同
急患の子をスリツパもはかず抱き　同
(人)スリツパをはいて硬派の氣が挫け　亂耽
(人)昂奮のスリツパ一つ裏返り　双車
(地)晝休みスリツパで來る喫茶店　水車
(天)スリツパをはいて病氣つたなて居り　秋月

席題　偶然　萬よし選

偶然ながら話まとまる　いわを
偶然を豫期して橋の上に立ち　麥魚
偶然がやつぱり運命だつた晩　青踏
偶然を驚く友に髭があり　山茶花
學友と來る食堂に義兄が居　北人
音のする方へ偶然目が出合ひ　主税
偶然か血液型もOおよ　奇可愛
偶然に勝つたのでないときの聲　白柳子
寶塚偶然といふ朗らかさ　哲郎
空想が偶然になる家を持ち　久郎
偶然がきつちり合うて疑はれ　鶴峰
偶然のあと酒酒酒　里十九
偶然の酒と鬼何處へゆく　鮎美
偶然に出會つて輕く借りの事　琴人
偶然同志が肩を叩き合ひ　涎湖
偶然は我を忘れた聲を出し　同
偶然に會へばやつぱり失業さ　さだを
偶然の眼に狼狽の色があり　同
(佳)偶然は蚊の居る家へ連れて來る　嶺月
(佳)偶然の林檎地球を圓くする　革郎
(佳)偶然を好い事にして歩かされ　柳次
(軸)氣狂ひになつて戀人知れるなり　萬よし

席題　責任　互選

責任へ餘儀なく垂れる頭なり　失名
預つた姉に濟まない子にさせて　同
責任と別な笑を社長見せ　忠彌
自動車の横を責任走らされ　かほる
責任を果してやつと宿の飯　革郎
算盤の下へ責任紛れこみ　亂耽

責任があって夜廻り木をたゝき　京二
責任は有るが俺には親がある　あや美
朝風呂へ宿直責任ながしてゐる　北人
責任へ女は泣いて〳〵すみ　圭悦
責任へしつかと鍵を渡される　誕湖
責任のないのがはたでさはぐなり　いわを
責任は金のあるのが持たされる　麥魚
やり甲斐のある責任を身に感じ　公二
責任へ型の如くに名を問はれ　柳甫
釣錢をしつはり握る小さな手　竹水
責任があればあるとてある不平　双車
父と云ふ責任があり靴を履き　鶴峰
其の議に及ばずと決まる留任　鶴峰
責任を全うせんと負へる怪我　同
責任はそれから後を譲り合ひ　山抱子
責任はひいた車に乘つたこと　同
最後には辭職と決めた無責任　山月
責任を逃れやうとて突込まれ　同
かぼそい腕をちゝはゝ待つてゐる　夕鐘
責任は兄の家出のその日から　同
責任を感じさびしく父笑ひ　鮎美
重傷のまだ責任を感じてゐる　同

川柳雑誌社 梅田支部小集句會（大阪）

五月九日　於里十九居　里十九報

兼題　爪　琴人選

爪もつみ明日全快の祝ひなり　方眠
たいくつの爪り留守居は爪を切り　夕鐘
此の爪の歪み女給へかくす氣の　四五磨
爪磨き無造作の掌の柔かし　同
爪切つて休みの晝を逢ひに出る　卜居
爪彈のそこへ夕刊投げ込まれ　里十九
女優いま花環の前で爪を切り　同
無性髯その爪先きも伸びてゐる　沐天
爪彈へ外は五月の雨の音　同
妾に爪をきらせる　鮎美
定休といふ職人の爪の垢　同
爪でつむ苺の赤さ陽のなかに　同
(佳)爪たてゝ人間腹をたてゝゐる　同
(佳)爪切つてそうか聞いてゐる　卜居
(佳)二人とも爪がきれいな家族風呂　かほる
(佳)青春の戀を持つ身の爪のつや　夕鐘
(佳)新聞をしいて新妻爪を切り　同
(軸)透きとうる爪へほんのり紅　琴人

兼題　焙出し　かほる選

焙出し提灯の灯の消えかゝり　四五磨
いゝ文句今度は已れがたゝかれる　夕鐘
焙出し旦那に書いてもらふなり　觀月
焙出し羞かしい事かいてあり　方眠
まんわるくあたりて淋し焙出し　まさる
逢ひ戻り焙出しをば買はされる　鮎美
焙出し髪の匂ひが迫つてき　琴人
あぶり出し雨本降りになりそうな　同
ラヂオもうあいて娘の焙出し　沐天
焙出し大人ほんまに焙らされ　同
焙出し一人はしやぐお染形　里十九
焙出ししあの妓は髪をといている　同
(人)焙出しやつぱり惚れて様に出る　同
(地)敷島の火で焼きぬいてられる　鮎美
(天)のつけかあはれと焙出し　夕鐘
(軸)焙出し踊りのはやし遠くなり　かほる

兼題　波止場　鮎美選

波止場にて女一人はあやしまれ　まさる
出稼ぎのはるかなが波止場の灯　方眠
にはとりも來てる初夏の波止場かな　卜居
波止場から大きな聲で手眞似する　觀月
波止場から三丁程はアスハアルト　里十九
絣着て着いた波止場の仄暗き　沐天
やつと落ちのびた波止場で捕まり　琴人
(佳)繪葉書へ波止場は鍵の手に寫　かほる
(軸)波止場の灯バンクロフトが出なう　鮎美

席題　化粧　四五磨選

化粧室一人這入れば又這入り　里十九
母さんの化粧子供ぬつてゐる　卜居
化粧の手止めて女中へ言ふ小言　沐天
お師匠の化粧驚ないてゐる　鮎美
化粧室匂ふ小瓶を並べたて　琴人
味ひ電話を掛ける薄化粧　かほる

席題　夕燒

夕燒をまぶしく會社退けて來る　四五磨
夕燒の遠く軍歌が聞えて來　卜居
夕燒けにきれいに見える女の子　かほる
夕燒のすゝきにとまる赤とんぼ　鮎美
夕燒を負ふて街から着いた馬車　沐天
職を求めて夕燒へ立ちつくし　琴人

席題　素足　沐天選

久し振り素足のまんま飲みに出る　卜居
朝顔がまだ咲いてゐる素足なり　琴人
伊達の素足に下駄がからころ　かほる
催促に尻をからげた素足來る　觀月
姉妹の素足になつて面白し　鮎美

席題　獨酌　互選

獨酌はちと腹の立つことがあり　雨町

獨酌へ雨に降られた子が戻り　沐天
獨酌の時間が少し早いなり　觀月
大阪で暮して獨り酌をつぎ　かほる
獨酌で知父は見てる鬼ごつこ　四五麿
獨酌へどこかで孚のなるもよし　卜居
獨酌へ隣りから來る燒豆腐　里十九
獨酌へひつたくる樣ついでくれ　孚人
獨酌のたばこをのむと醉ふて居り　鮎美
獨酌の夕顏を自慢してる也　同

川柳雜誌社
神戸支部
五月句會（神戸）
五月十三日　於八宮神社內楠町事務所

西村明珠報

兼題　ほくろ。　靖弘選

新妻のほくろぐらいに氣をとめず　繁堂
見合いする黑子へ厚く厚く塗り　笹舟
眼の下のほくろを舞妓からかはれ　月舟
本當の母親だけが知るほくろ　桃水
スカーフをはれ目に立つ咽喉ほくろ　伽羅洞
苦勞するほくろと老けた母に逢ひ　素生
叱られてほくろあり〳〵見つめられ　明珠
人絹の艷へくづれる附けぼくろ　不然
すぐ嘘の云へるほくろを見つめられ　九葉
ほくろある男噂の中に居る　華水
（人）囁きにほくろのありか見つけられ　同
（地）姉妹のほくろ違つた運をもち　月舟
（天）くもり日の晝のほくろへ泣けてくる　九葉
（軸）膝かしら耳のほくろをいじるなり　

席題　合槌　桃水選

合槌を打ちに社宅をまわつて來　靖弘
合槌を打つて味方になり切れず　よれ子
合槌のわざとらしさが氣にかかり　春秋
合槌をうたせて置いて金の事　伽羅洞
合槌を二遍續けてマチをすり　九葉
合槌のうまい女がそれまれる　明珠
合槌の男煙草を無駄に吸ひ　華水
（佳）合槌のうまい男にまたされる　同
（佳）合槌のうまさに馴れ嘘が出る　不然
（佳）合槌へ感謝を持たぬ男なり　繁堂
（佳）合槌の巧さ主任へ向ける椅子　素生

席題　釦　九葉選

ときめきの胸へ釦を押へてる　竹風
くつろいだ話へ釦はづされる　鬼石
寶塚飾釦へ春の風　春秋
釦一つ朝の疊の無事と逢ひ　桃水
迷子の釦を巡査はめてやり　靖弘
出勤のボタンの冷たさに觸れる　素生
朗らかな胸から釦はめる朝　同
（人）大學の釦へ若い胸を張り　竹風
（地）縫ひつける釦へ針の先の顏　桃水
（天）俄雨釦はみんなかゝつて居　華水

席題　老眼　春秋選

老眼の涙を極道ちらとみる　笹舟
老眼の記者へおろ〳〵泣くばかり　靖弘
老眼も圍棊の中の蜆汁　桃水
老眼にまばゆい晝を孫とゐる　よれ子
老眼は讀む新聞の手を伸ばし　月舟
懸取りに來て老眼ににらまれる　素生
（客）老眼へ毛虫素直になつてゐる　華水
（客）老眼の上目使ひを嫁きらひ　芙城
（客）名刀へ鋭く老の眼が光り　不然
（客）老眼にしてから年を疑はず　明珠
（客）老眼のすきから息子叱られる　同
（人）老眼をかけて約手を吹める　同
（地）老眼へ線路工夫の怒鳴る聲　伽羅洞
（天）老眼へ女給の小さい字の手紙　同
（軸）老眼へ蠅が飛んでる暖かさ　素生

席題　嫁　選

言ひ切つて嫁の秩序くなり　明珠
セル似合ふ嫁の年が聞かれて居　不然
嫁もうメランコリーな夢を見る　伽羅洞
尖端の嫁に田園續いて居　華水
眼醫者から嫁が戻る晝の冷え　九葉
この霙路の朝を出て行く嫁が二人　同
（佳）まつすぐに嫁歸れば陽が高し　明珠
（佳）應對も嫁はつきり留守居する　桃水
（佳）口答へしてる嫁の帶の音　同

席題　腕時計　互選

遲ましい腕に時計が止まつてゐ　竹風
腕時計記念にしてはよくとまり　靖弘
相談が集まつて來る腕時計　よれ子
腕時計耳をあつれば生きてゐる　桃水
かかり湯にふと氣のついた腕時計　不然
腕時計きかれた方も遲れてゐ　伽羅洞
腕時計電氣時計の前へ來る　素生
腕時計叱られてゐて見られない　明珠
腕時計つまらん話續けられ　華水
子を抱いて腕の時計をフト感じ　鬼石
腕時計ルツクサツクへちと弛み　繁堂
驛迄は腕の時計に信じ切り　同
腕時計女房ふだんはしまつとき　春秋
腕時計マダムの腕に溝をつけ　同

川柳雑誌社 御旅支部五月例會（大阪）

五月三日　於　茶臼山旅館　櫻井圓角報

兼題　詰襟　路郎選

詰襟の下駄を履いてる夕餉ごき　あや美
春の風まだ詰襟のうそさむく　翠夢
詰襟でこそあれ踊も知つて居る　圓角
詰襟の得意の姿永久にあれ　路烏
入學の詰襟を着て母子笑む　同
詰襟を着れば給仕にされてゐる　みつる
野心なくその詰襟は金をため　同
（人）詰襟は詰襟だけに見られてる　同
（地）詰襟を脱ぎすて別な顔で出る　多郎
（天）詰襟で直立不動を知らぬ妻　圓角

兼題　入歯　路郎選

義歯をすゝてボーナスを待つ母よ　圓角
のたまはく前の入歯は眞かつたに　路烏
入歯の話しに女心のあらはなり　多郎
老ひたれど並ぶ入歯のうれしさよ　斐美
見とれてゐる女給の入歯に春の浮く　同
不渡りに入歯がチヤ〳〵十二月　翠夢
百圓といふ入歯をば出して見せ　同
伊達入歯した頃思ふ失業者　みつる
プラチナの入歯そのまゝ死んでゆき　同
見せる氣で喋る女給の金歯なり　同
（人）目がよいの入歯がよいと夜を更し　圓角
（地）どうして入歯さへせぬ母になり　路烏
（天）入れに來た入歯の型の淋しく　路郎

兼題　時計　路郎選

腕時計歯車などを這入つてる　斐美
時計の如く働くも生きるだけ　多郎
腕巻の無心を聞いてやりたくも　路烏
戸を叩けば午前二時が鳴つてゐる　翠夢
時計なと買つて置けよといふお金　圓角
出動へ冷い朝の大時計　同
時計をば玩具のやうにほしがる子　みつる
（人）約束へ時計を出して爭ひし　同
（地）正確な時計がにくい停車場　同
（天）時計が炊しいと云ふ子になり　路烏

兼題　鮮　路郎選

三味とめて鮮へ羽織ぬぐ女　路烏
出養生下女の鮮の健かさ　圓角
久潤に鮮も墓し國の家　路烏
（秀）鮮々添寢のママの方が先き　翠夢

席題　明日　路郎選

降る雨に氣を腐らして幹事寢る　圓角
踊騷明日の顔ですましてる　翠夢
（秀）結婚が明日にせまるに何を云ふ　路烏
（秀）どんな氣で明日が約束てゐるのか　翠夢
（軸）明日來るといふ人の手を握めし　路郎
（同）米が切れて來るのに明日を考へず　同
（同）心にもない約束が明日となる　同
（同）晩酌に明日といふ日はなかりけり　同
（同）念を押すほどにあしたの遠くなし　同

席題　横町　路郎選

横町で横を向ひたはさとなじみ靈芝
呼出した横町都合よく暗し　翠夢
横町を曲れば別な風が吹き　同
横町に住めど矢釜家で通り　圓角
（秀）ついて歩けば横町をふみまよひ　同
（軸）捨扶持で生きて横町名を知られ　路郎

川柳雑誌社 御池橋支部四月例會（大阪）

四月十七日　村松夢裡報

兼題　公園　靈堂選

別れ來てふと公園の灯を見つめ　蛙川
公園に埃まみれの忠魂碑　いわな
公園を感激もなく過ぎた朝　譲次
ベンチ皆塗り變へられて春を待ち　三碧
二人居る芝生へボール飛んで來る　同
公園の櫻も今日は人に醉ひ　忠彌
公園のベンチ秘密をヂット聞き　同
誘はれて來た公園の馬鹿らしさ　同
（人）禮裝がいる公園は幕を張り　光路
（地）あけきらぬ朝博物館の白さ　譲次
（天）公園で今日も眺めた白い雲　三碧

兼題　春の花　光路選

前裁の櫻を賞めて家主去に　三碧
公園の埃を浴びてチユーリツプ　雅純
春風に花は滿開飢えて居る　ポ蛙
病んでゐる心に春の花もなき　蛙川
花吹雪しだれ柳もゆれてゐる　夢裡
興奮を愼め顔なチユリツプ　宏朗
花の吉野へ一圓半と貼つてあり　青兒
日曜日迄は待たない山櫻　同
懷の加減忘れて花に醉ひ　同
櫻咲く國にもあるよストライキ　忠彌
花に醉ふ人に巡査が馬鹿に見へ　同
當てもなく出て夜櫻に足が向き　同
公園の隅にそだつたヒヤシンス　譲次
菜畑に農夫の一人ゐる廣さ　同
（佳）エロもなし未練も云はず山櫻　白石

(同)愛の巣へ留守勤なチユーリップ　同
(同)交番の窓に一輪チユーリップ　同
(同)チユーリップ春の日差のぶしぶし　譲次
(同)櫻見づに櫻に移る春の酒場　千舟
(同)八重一重砂塵を避けて塀の内　夢裡
(同)方丈へ心無く散る山櫻　三碧
(人)断念た瞳に赤いチユーリップ　宏朗
(地)エロの香もすこし孕んで桃の花　白石
(天)花三分動物園へ灯がともり　三碧
(軸)はたちまで間のある姿桃よ春　同

兼題　血　山雨樓選

血走つた眼へ春の日長かないわを
血のにじみ冷然として動くメス　譲治
血と肉がしぼられてるよあの煙　聞祿樓
血のめぐりよすぎて頬の骨がたち　光路
傳來の古刀に淡い血の曇　三碧
若き血をものうくさせる花曇　同
思ひ出は血の氣の多き戀なりし　宏朗
血痕へづか〳〵〳〵と來る刑事　同
血の香に迷ふ春のカクテル　靈壺
毒血を吸ひし絹のハンカチ　同
忍從に馴れて血氣も失せて來た　忠彌
(人)血の氣失せた犯人の顏　同
(地)輸血した無言の顏が室を出る　宏朗
(天)血を吸つた樣な舞妓の口の紅　忠彌

席題　墓場　靈壺選

一週忌墓場の石は未だ白しいわを
末世とや墓場に地藏鼻が欠け　光路
春雨に音よく墓場暮れてゆく　譲次
歡樂境塀のむこうは墓場です　同
近道の墓場の朝をなつかしみ　三碧
歸省して母と訪れる父の墓　同
(人)女一人墓前にうなじみせて　譲次
(地)めそかよこゝか捜す叔父の墓　雅純
(天)朝靄の墓場に咲いた寒椿　三碧
(軸)愛人の墓に秋蟲チチと啼く　光路

席題　程々　選

程々に將棋なかなか止めぬなりいわを
程々に止めたいのだが殘り酒　雅純
程々に扱われたる行商人　夢裡
程々に濟めば世の中明る過ぎ　ポ蛙
程々の過ぎしを兄は知つてゐる　宏朗
程々に昇つてくれぬ統計表　同
程々に女俺おばみてはゐず　同
程々にやめられぬものに女あり　譲次
程々にやめればならぬ妻がある　同
程々に醉はして女給强要るなり　忠彌
(人)程々を越しては胃散なの居り　青兒
(地)程々に調節されて子の生れ　夢裡
(天)程々に飲ましておけば好い男　忠彌

席題　眉　墨　互選

雅純
眉墨ばかり舞踏場いわを
眉墨は皆一樣に細長し　譲次
踊妓の眉墨の黑さ知つた宵　三碧
長ふ眉ひいて待たせたと云はゞ來る　星光
こくひいた眉墨笑はゞ笑へ　千舟
買立の眉墨馬鹿に濃く塗り　同
公休日女工の眉い片跛足　白石
眉墨の太さ細さを子はたづね　澄んだ眼にしつくり合つて眉の墨　同
向合て見た眉墨の淋しさよ　忠彌
眉墨を洗ひ落せぬ女なり　宏朗
薄いドレスに長い眉墨　同
眉墨も引かず女給の居る眞晝　同
愚かにも眉墨太きマダムなる　靈壺

川柳雜誌社
鶴町支部　**鶴町川柳行脚**　(大阪)

關本雅幽報

團子　かほる選

お土産の團子忘れて花見客　秋月
だんご買ふ肩へ櫻が散つて來る　碧耶
醉はぬのが土産の團子持たされる　紅
團子が嫌ひでも無いむすめたち　小柳子
頬張つた團子で返事遲くなり　榮坊
(人)蓄音器は一つぶくしてる團子　雅幽
(地)きびだんご晝の御飯を叱られる　同
(天)夜店でば團子を作る忙しさ　天柳

夕餉　愚圖坊選

夕餉すめば居眠る寢ころぶ子供達　竹葉
掛け取りが夕餉の時を見はからひ　ひさを
これ賣れば二十錢だ夕餉だ　元山
夕餉には一家五人が揃つてる　天柳
夕餉にはちやんと歸へる庭の犬　榮坊
新婚の夕餉の膳に顏を染め　小柳子
夕餉もみしい母は病んで居る　秋月
誕生日の夕餉の膳に太き鯛　紅
夕刊も添へて女房は待つて居り　同
夕食へ子は算術を聞きにくる　變人
湯の宿の夕餉旦那振つてゐる　白石
なまめきの中に夕餉のフト思ひ　同
叱る事あるとは知らぬ夕餉なり　木馬
戀を知る頃の夕餉のつまらなし　同
風呂からの歸りを夕餉待つてゐる　碧耶

子供等は夕餉へ手足汚して來　同
父の留守陽があろうちの夕餉なり　雅幽
菜の花は夕餉烟つて暮れて居る　同
殘された夕餉の母の落ちついて　同
產褥へみんな仲頁き夕餉なり　同
電灯も笑ひ夕餉の輪になつて　同
(軸)打ち揃ふ夕餉の膳に蓄音器　愚圖坊

鑵詰　互選

鑵詰のレッテル見ても美味しさう　秋月
鑵詰めで櫻の下の送別會　ひさを
鑵詰で食べた握り飯のうまさ　のぶを
獨り者今日も鑵詰買ふてくる　小柳子
寶來煮比叡の山の酒の味　變人
鑵詰を切るのを亭主頼まれる　碧郎
半分を明けて鑵詰それでよし　同
鑵詰を切るにきような夫なり　木馬
引越した後に鑵詰罐一つ　同
鑵詰でチビ／＼呑んで一人者　榮坊
愛の巣は鑵詰ばかり買ふて來る　紅
鑵詰は開けて臭ふて箸をつけ　同
酒呑みの叔父へ鑵詰よろこばれ　元山
南洋の味鑵詰のパインナツプル　天柳
鑵詰の底つゝいてる淺草苦　同
鑵詰の殼ばつかりの暮し向き　愚圖坊
あき鑵がころがつてるキャンプ跡　同
令孃の手に鑵詰の冷淡さ　松枝
鑵詰を開ける妻の手あぶなかり　同
鑵詰を覗いて寢室せつながり　雅幽
鑵詰の土產下宿を尋れて來　同
鑵詰も一箸だけの病上り　同

挨拶　互選

不用意に挨拶すんで汗を拭き　竹葉
挨拶に自分の癖を見つけられ　小柳子
挨拶に若い夫婦の離れすぎ　雅幽
挨拶の仕方習つて外出し　のぶを
目と目とかちあつただけの挨拶　ひさを
挨拶にチユーブの父は無言なり　秋月
挨拶に頭をかいて二日醉ひ　同

川柳雜誌社
螢ヶ池支部　**五月句會**（大阪）

茨木奈緒美報

五月六日

こゝ数日、快晴つゞく、春なかば、若葉薫る中に、五月句會を開く。この日本社より緣雨、雨町、かほるの諸氏の御出席を仰ぎ、熱心に句作三昧に入り、三時すぎ、盛會裡に、散會する者、二十有餘名。

兼題　パラソル　かほる選

昂奮の彼はパラソルそむけられ　逸朗
パラソルが輕くまわつた池の端　杜洋
艶やけきパラソルどこか女給めき　鳳翠
パラソルへオールの飛沫チトかゝり　六華
噂するそばをパラソル歩いて來　照夫
團体のパラソル色が褪せてゐる　沙門
ビルディングぞふパラソルに見上げられ　愚籠
市場から去ぬパラソルは褪せてゐる　可章
寫眞機の方へパチソル振り返り　奈緒美
パラソルの顔へ自轉車チトよろけ　銀花
初夏の日を受けてパラソルすが／＼し　道人
パラソルに今の若さをみせてゐる　石松子
パラソルを母に持たせて百貨店　緣雨
三十一年型のパラソルへ雨が降り　舟路
パラソルは露路を明るくして通り　水馬
パラソルが事務に疲れた瞳をうばひ　康夫
パチソルの色めく午後の街となり　同
パラソルを待たして男まだ泳ぎ　百萬石
はにかみをみせてパラソル背が高し　同
午後の陽へパラソルだけが違ふ色　一流
パラソルは大きく笑つて撮される　同
沖合の舟にパラソルくつきりと　町子
パラソルゆのかハツキリとアスフアルト　晴夫
たつた一人パラソルのない娘が行く　同
パラソルの群れそよがせて宮武君　五百吉
パラソルの技巧に富んだ身のこなし　同
(人)パラソルを目標にボート戻つて來　沙門
(地)小間使パラソルで行く薄化粧　狂児
(天)パラソルの先へ初めて見る景色　句郎
(軸)弟をからかふてやるパラソル　かほる

兼題　腕　雨町選

病床に過去を凝視める腕を撫で　思芳
傑作の寂しい腕を褒められる　逸朗
總罷業さて明日かと腕をなで　長二郎
戀人の腕は互ひに縺れ合び　麗泉
振りあげた腕を同志に支えられ　石松子
腕づくでこいと議論に負けてゐる　沙門
獸人の腕に覺えがあるわい　愚籠
頑丈な腕の中なる兒の笑顔　紅蔦
此の腕が承知しないと竹刀取り　伊勢子
骨立つた腕を無氣味な脈が這ひ　可章
健康のほこりを力瘤に見せ　紅玉
力持ちみんなにみせた太い腕　緣雨
母の腕に三人の子が伸びゆく　銀花
あの頃を語る親爺の腕ッ節　百萬石
來客へ今日女房の腕の冴え　同

毛ぶかい腕君が前にだしかれて　かず子
ダンサーの腕やんはりと脊にくる　奈緒美
握つてみる腕もかなしく病んでゐる　六華
腕相撲樂々勝てゝつまらなし　同
賴母しき腕にガールの波は散り　杜洋
病み痩せし腕の白さないたわりぬ　同
脈を取る腕の若さへ眼をそらす　白眼
働ける腕をむざ〳〵病みくちる　同
片腕が壹百圓の包み金　晴夫
盛り上る腕の太さを夢にみて　同
この腕も何日か役立つ日があらう　舟路
土産はと父のかいなに飛びついた　飛車
いゝ腕をたゞ變屈が遊ばせる　水馬
青剃の腕になやみのある日かな　藏六
腕の毛が晝風呂不思議そうに撫で　禮二
腕を組む程困つてはゐぬらしい　同
七客の病んでゐる腕の太さを競べ合ひ　狂兒
腕振つてゐる若さの遺り場なし　晴夫
腕をさすつて不景氣だ不景氣だ　藏六
なぶられてゐるとも知らず力瘤　沙門
思案ついて腕組み立ち上がり　一流
やせ腕を若葉の下で出して見せ　康夫
さげられるかなゞ腕を案じ　綠雨
痩腕に力瘤等作つて見　道人
敢然と立つて拳のやりどころ　百萬石
何となく腹立たし腕なり腕なり　思芳
ハンマ持つ二十の腕に五人生き　照夫
湯につかりかぼそい腕をいたわり　町子
片腕はベルトにやつたと云ふ男　鬼子
我れながら慘じめな姿腕を組み　一流
セルを着てしきりに腕をまくる　康夫

席題　膳　　綠雨選

膳立てゐる待つ間の酒に醉ふてくる　康夫
かげ膳の一人偲ばる松の内　照夫
父さんの居ないお膳は早くすみ　鳳翠
せめて子はいぢけさせまい膳の上　可章
醉ふてやる劍舞いきなり膳を踏み　藏六
其の頃を語る膳立暇がいり　逸朗
一合の酒がうれしい父の膳　奈緒美
下宿屋の膳へ書留もつてくる　同
お頭が膳にのつてる嬉しい日　沙門
お茶椀の音に子供が起きて來る　同
慶びのお膳へ母は小さくゐる　一流
膳立へ丁稚つまらなく座わり　同
膳立が出來たに客は揃ひかれ　伊勢子
食慾の出ぬにもない膳が來る　鬼子
膳立の不平が言へてよい暮し　六華
父はまだ新聞を讀む朝の膳　康夫
今日からは母の菜椀も箸もなし　かほる
お世辭を言はばならぬ膳が來る　百萬石
膳立も出來爛も出來呑み仲間　綠雨

席題　猥談　　互選

よい歳をしてと猥談嗤はれる　藏六
猥談のあと冷々と涼み臺　照夫
まだはじまつた猥談へ苦が笑ひ　石松子
猥談へふと吾が年齡を考える　沙門
猥談へいつか眼鏡をはづしてゐ　奈緒美
寄宿舍へ戻り猥談はずむなり　鳳翠
猥談で月日をすごす人がある　飛車
世間話もつい猥談となり　麗泉
猥談のはずむ隣りの水枕　可章
猥談へ娘まつかになつて逃げ　伊勢子
猥談がすんでシーンとしてしまい　同
猥談へ女素知らぬ顏で居る　紅蔦
猥談へ夫の秘密ばれてゐる　同
猥談へ夜泣きうどんが聞えて來　康夫
猥談に慣れて雜魚寢の夜が續き　同
猥談も言へて心やすく暮し　六華
足音に猥談一時中止なり　同
猥談の中で平氣な齡になり　一流
猥談へ調子に乘つた馬鹿らしさ　同
あの親爺何時も猥談持つて來る　かゞし
猥談を聞いた其夜は眠むられず　同
猥談へ聞いてゐたのもつり込まれ　雨町
猥談にたゞにや〳〵と笑ふだけ　同
猥談にいつも後まで居殘りて　十千夫
猥談つてどんな話と弟きゝ　同
猥談にから〳〵笑ふ未亡人　逸朗
猥談になると無學も喋り出し　同
猥談へ仲居かる〳〵口を入れ　同
猥談に金をためてるのがだまり　綠雨
猥談に膝をくづした午前二時　同
猥談をぶつりと切らす母が來る　同

川柳雜誌社
簸川支部　**四月臨時句會**　（島根）

四月二十五日夜於綠之助居伊藤綠之助報

兼題　蛙　　紫光選

淋しさは蛙の聲に夜が更ける　美登利草
乙女打つ鋤の先から蛙逃げ　柳光子
むしあつい夜の蛙をきいてゐる　和彦
雨の日を蛙が啼いて眠くなり　華村
馬の足許に蛙は餌を奪ひ合ひ　麗亟
（人）雨蛙無の二人へ啼きつゞけ　綠之助

(地)溜池の蛙がみんな浮いて晝　同
(天)藪に居て世相と別に蛙生き　同

席題　風　　綠之助選

ランデブーほてつた顔へ風が吹き　美登利草
洋服にして來ればよかつた向ひ風　華村
砂煙風追ひかけて走るなり　柳光子
唄の出雲だ湖の風　和彦
(佳)悲戀の春ぞ風がなぶる　麗亟
(佳)汗ばみて働けば風がある　和彦

席題　腕　力　　麗亟選

腕角力負けた方から又挑み　柳光子
若かつた項の話に腕を撫で　綠之助
腕の白さに盛り上りたり情火　同
(軸)腕力へ親のない子が詫びてゐる　麗亟

席題　港　　綠之助選

朝ぼらけまだ夢みてる港町　美登利草
港の灯しよんぼり灯り午前二時　紫光
淋しさに來れば港の沖の限りなく　同
テキプひた〳〵港の夕燒　麗亟
船唄に思ひ出される港町　美登利草
夜の港ガールの音の冴え切つて　紫光
港から出たばつかりの船に醉ひ　同
島影も淡く港の夜が冴え　麗亟
(秀)夜を走る船へ港の灯が明い　同
(同)子と別れる港の空の青さよ　同
(同)波止場から淋しく戻つて脱ぎ捨てる

川柳雜誌社
簸川支部

五月例會（島根）

五月九日夜　於紫光居　伊藤綠之助報

兼題　顔　雷　相選

顔粧る女給の耳にジヤス高し　美登利草
今着いた顔へ川風心地よし　春歩
告白を結んで蒼い顔を擧げ　麗亟
(人)決心の顔へかたむく三日月　同
(地)退院の顔に明い片靨　同
(天)面影も失せて孤獨の日を送り　紫光

席題　鏡臺　　麗亟選

鏡臺の中にたゝむだ戀の文　華村
鏡臺へ今の欝噴はらしに來　雷相
鏡臺よ哀れな母が故郷に居る　同

席題　笑　　紫光選

娘達一緒に笑ひ氣にかゝり　華村
妻と子の笑顔が消える門を出で　春歩
笑聲春の尼寺からもれる　雷相
冷笑へ挑戰的な媚を見せ　麗亟
ほゝゑみのどこか幻追ふてゐる　同

席題　薄情　　互選

薄情といふて泣いたも女です　紫光
薄情をうらみ夜道を一人去に　雷相
薄情が言はせる皮肉に灯が震ひ　美登利草
薄情に言はれて妻の默したる　麗亟

川柳雜誌社

加古川支部例會（兵庫）

四月五日　水田篤男報

職人

建前の振舞酒に醉ふて居り　洛陽
職人になる氣で風呂の水を汲み　泰山
職人に似合はぬ今日の晴姿　魚城
失業者見れば職人自信あり　同
沈默の職人冴へた腕を見せ　美也光
この職で掩は死ぬ迄暮すのか　同
すき燒匂ひが職人よくこたへ　同
職人の仕事の匂ひさせて來る　光穗
日を延ばす職人今日も遊んでゐ　同

内氣

小心な友が鐵火な女房持ち　光穗
未亡人がおそろしなつた若燕　同
内氣者一人淋しくほつとかれ　魚城
紹介所の扉を弱い氣で開き　同
貸ボート内氣な友をこはがらせ　光穗
小心な主人に尤もよく似てる　同
内氣だと云ふか獨唱もやつてのけ　泰山
仲人は娘の内氣褒めていに　同
弱い氣へ女給力を貸してやり　篤男
小心を叱りつゝ杯を呉れる父　同
云ひまけた兄の氣持を母が知り　同
尋ぬれば内氣な亭主の愚痴になり　桃夢
内氣だけに馘首からのがれてゐ　美也光
弱い氣を殺して借りに行くときめ　同

水枕

水枕今は笑ひの種となる　魚城
尋ねると淋しい音が水まくら　泰山
たれよりも母をこがれる水枕　同
水枕女房は無理にすゝめてき　美也光
今日は食ひ込んだと思ふ水枕　同
待ちかれた今日も取られぬ水枕　同
水枕鼾ばかりへ癇が立ち　光穗
母親の痩せたと思ふ水枕　同
水枕氷嚢の紐脈を打ち　同
水枕へ聞かれとむない熱となり　篤男
水枕を變へる瞼にきつい朝　同

同人社友懇談の夕

五月十日夜　於事務所樓上

編輯其他の重要事項協議の爲め十日の宵から同人社友會を開く。十一時近くまで一瀉千里で議事を進めた後、ビールの滿をひきながら惜しくも散會する。會する者、路郎先生、ひろし、素人、琴人、綠雨、杏三、町二、新水、靈童、夢裡、雨迷、汀柳、鶴峰、山雨櫻の十四名

席題　謎

目と手と言葉と別な宵の口　杏三
運ばれた兒器は霧と血に濡れて　町二
謎解けて急にお客へ氣を使ひ　夢裡
謎などをもう佛門に忘れて居　新水
呑みに行かうといふ謎は早わかり　琴人

川柳雜誌社神戸支部　部友句會（神戸）

四月十六日　於華水居　西村明珠報

三輪車、新聞、計畫

三輪車歸つた父に門で會ひ　春秋
新聞を踏んで通つて叱られる　同
新聞屋一ト月だけと庭にゐる　同
新聞屋會社の塀をよく走り　明珠
新聞へふけを落したひまな晝　同
新聞屋こはい男に斷はられ　同
新聞をかぶつて走る俄雨　華水
問題の新聞手から手へ屆き　同
計畫が電車の中で續けられ　同

酒、金魚

金魚鉢去年の石が入れられる　華水
ゆるされず初めは下戶の受けてゐる　同
眼鏡はづして酒の座がしらけ　明珠
金魚鉢下女は仕事が一つふえ　同
酒倉へだんだん春の日が暮れる　春秋
孝行へ親爺少うし飲み足らず　同

席題　燒芋　互選

燒芋の蓋に隙あり湯氣があり　春秋
燒芋の大きさにゐる兄弟　明珠
三輪車より〳〵ついた燒芋屋　鬼笑太
燒芋に小使室は更けて行き　華水
針さしの上で燒芋湯氣を立て　同

雜題　惡口　華水選

社長の惡口が續く化粧室　靖弘
惡口と五十女の負けてゐず　春秋
惡口を聞いて欠伸を嚙みころし　明珠
言はれてるのを知らずして寄つて來る　竹風
（佳）惡口を言つて仕舞へばふさぎ淋し　同
（軸）惡口もよし信じてる友　同

席題　葉書　靖弘選

繪葉書へ萬年筆のインキ絕え　華水
御主人へよろしくといふハガキなり　春秋
女手の葉書大びらに投げ込まれ　竹風
安心をせよとて葉書二度も來る　明珠
（佳）待つてゐる事も葉書の端に書き　同
（軸）春の夜をはがき一枚書いて寢る　同

席題　弟　明珠選

祭禮へ道場持ちは弟子をつれ　春秋
戀人の連れた弟に手をつなぎ　竹風
弟の腕へ姉は智惠を貸し　華水
弟からのたより蛙が鳴いてゐる　靖弘
（佳）門出して弟にすまぬ事ばかり　同

席題　星　春秋選

逢びきの眼に星がつめたく光る　靖弘
待たされて星はだん〳〵ふえてくる　明珠
（人）ルンペンへ星はまばらに光つ居　華水
（地）星月夜橋のたもとに人が居る　鬼笑太
（天）本町通りで金星を見つけたり　竹風

雜題　斷腸　互選

斷腸を見せる苦心に主役痩せ　春秋
涙頭思ふて見ても身は一つ　鬼笑太
斷腸の思ひがバスにおどかされ　明珠
間に合えば聞いてやりたい妻は逝き　竹風
戀二人叔父のやさしさが別れさせ　靖弘
酒飲めご心配事がこびりつき　明珠
斷腸は金紗の帶を握るなり　春秋
ぬれぎぬの俺の心を知つてゐず　華水
斷腸へ月の光もうるんで居　同

塗青柳壇四月例會（大阪）

四月二十五日　熊谷紅報

席題　別莊番　互選

ヤレ〳〵と主人歸して別莊番　秋月
珍客に別莊番も饗られる　木馬
別莊番今日は倅の七回忌　同
別莊番只のんびりと日を送り　章
あくる日も淋しく暮す別莊番　たけし
買主へ其まゝ續く別莊番　紅
土佐犬と爺やに無事な日が暮る　變人
別莊番五勺の酒に醉てゐる　英賀夫
今の身に落葉も淋し別莊番　光路

席題　バス　清記互選

愛嬌が滿員にするバスガール　ひかる
乘客がないのへ車掌やつしてゐる　天柳
街道をバスは面白さうに搖れ　木馬
女中今バスにゆられて歸るなり　英賀夫

三點句

自動車とせがむ子供をバスに乘せ　秋月
日曜の子供バスではごまかせず　ひかる
プレーキの音よしバスを飛んで降り　木馬
草餅が隣村からバスで來る　紅
畔道へパンクのバスはほとつかれ　同
北淺や梅田を乘せてバス重し　變人
バスガール眠りつゞけて晝靜か　同
曲りますバスそれ程に搖れぬなり　光路
バス搖れて肘に隣の柔らかく　同

五點句

空バスへ遠慮のいらぬ戀に成り　英賀夫
搖れて見て始めて知つたバスの味　元山
七點句
圓タクで飛して來たとバスで來る　元山

席題　一と足　英賀夫選

鼠とる猫は一と足後へ寄り　章
一と足の違ひで汽車の笛を聞き　元山
一と足の差は運命を右左　ひかる
決勝點一と足惜しい負けになり　天柳
役員は一と足先え運動會　秋月
(佳)責任に弱さ一と足逃げを張り　光路
(同)踏切番一と足ながながあなどらず　木馬
(同)一と足の違ひを芝居泣かせる氣　變人
(人)一と足の違ひ骸の殘るのみ　光路
(地)土俵際今一と足の力こぶ　紅
(天)一と足の事で双兒の兄となり　光路
(軸)一と足の事も麗人呼びつける　英賀天

兼題　突然　光路選

突然の集金人に面喰ひ　章
突然の客は下宿をおびやかし　ひかる
突然に止まり車内は皆んな立ち　秋月
突然の悲報動悸の胸を撫で　紅
突然のお客無心を言ふらしい　天柳
突然の話に皆んな默り込み　元山
(佳)成功の夢突然に戻つて來　木馬
(同)突然に來た珍客に徒勞れる　英賀夫
(同)心得ぬ人に突然お辭儀され　木馬
(同)突然に會へば一人連れて居り　ひかる
(同)突然と言ふには悲し不具と成り　變人
(秀)なやんでる戀は突然横に成り　木馬

兼題　新綠　光路選

一坪の庭に樂しむ者綠　ひかる
新綠の此所らの空氣譽めて居る　英賀夫
芽柳も添へて四ツ橋撮される　紅
新綠に紅一點の見えかくれ　ひかる
新綠で交番更に影に成り　木馬
新綠の影に親父の髯をそり　變人
(佳)新綠に成つて仔馬の肥つて居る　變人
(同)新綠の野に牛の綱長い事　木馬
(同)新綠へ植木の棚を置き替える　紅
(同)新綠の頃セルの頃戀を知り　子元
(同)新綠の古木はさゝへられたまゝ　木馬
(軸)更生の意氣に新綠延びんとす　光路

綠雨居小集（大阪）

橋本綠雨報

五月十四日

此の日春の暖き好天に惠まれ作句雜談に更けり、西村山月君は寫眞機で持參したのでみんなを寫す等樂しき小半日を過しました

臺所

臺所慌てた足へ飯がふき　山月
胡瓜もみ靴音を待つ臺所　綠雨
もう出來たかと臺所へやつて來る　同
國からも來て臺所滿員だ　濁水
臺所酒屋心得顏で來る　鶴峰

華水居三人會（神戸）

西村明珠報

五月九日夜

席題　金　鹵

椽側へ入鹵を見せる口をあけ　春秋
娘十八金鹵も入れたし　明珠
鏡には金鹵はつきり光つてゐ　同
落ちぶれてからは入鹵に隙が出來　明珠
祖父さんの入鹵へ餅がうまくやけ　華水
よく喋る女給入鹵が多過ぎる　同

奉天川柳會四月例會（滿洲）

於料亭菊水　岩崎柳路報

日本なら二月に見られる筈の櫻が今を盛りと咲き誇り餘寒未だ去らぬ四月廿九日天長節の佳節をトして例會開催。支那人までが吾國旗揭揚して居る祝賀氣分橫溢する街のサンザメキに倒稜威の旺んなるを壽ぎながら出席す。午後七時會する者、連樂、星明、笑鬼、白洋、保月、筑水、登美坊、柳路、其他。宿題席題發表後例に依り餘興の相摸吟を催し○時半散會す。

宿題　質

質札も出して離緣を迫るなり　自由
質屋から一目散に月明り　同
性質へ仲人の膝ゲツト出る　連樂
髮結と質の看板露地を指し　同
質種もなく失業の夜を步るき　白洋

伊達引のうらに質札二三枚　筑水
決心は質屋の門でチトにぶり　一平
質札へ初めて知つた人間味　笑鬼
人質が醉ざめのまゝ寢ころがり　登美坊
元來が氣質の相違不貞寢する　同
鞍替の女質札それつきり　星明
(感吟)同情を居て質屋出しぶり　雨明
(同)現金に替えて質屋を出る寒さ　同
(同)性質へ女房すなほにかしこまり　笑鬼
(軸)預つたビクター質屋掛けて見る
(同)染替を質屋の藏で待つて居る
(同)十八金ですと質屋へ言添へる

宿題　提灯　星明、笑鬼共選

初盆の佛間提灯かなしい灯　雨明
提灯で街いつぱいのさんざめき　一平
提灯に一寸おくれて杖と行き　筑水
提灯へ迎へる妻の灯をとぼし　同
献燈の筋で背なの子搖り起し　連樂
提燈の灯へ花嫁は下を向き　白洋
提灯もなく寒行の尼二人　同
目標にして來た提燈露地へ消へ　保月
提燈へコードが續く甘栗屋　登美坊
古提灯此んな所に穴があり　柳路
二重橋君萬歳の紅提燈　同
(人)献灯を燒けて夜臺はさっと立ち　連樂
(地)うつむいて棚から下す大提燈　一平
(天)提燈の止まる廣さの水溜り　筑水
(軸)提灯の明り心中の白い足　星明
(同)提灯をハツキリ見せる火事見舞　笑鬼

席題　足音　互選

足音へ帶〆め直す色をもち　白洋
軍歌もう辻を曲つたらしい聲　登美坊
蝸のフト足音に鳴を止め　星明
ハツキリと亭主醉ふてる足の音　笑鬼
足音を待つ女房は縫ひつゞけ　白洋
足音を聞きわけて行く姉藝者　保月
足音へ燗瓶を持つ四疊半　連樂
足音で看護婦が來たなと思ひ　柳路
病床へソツト來て見る水枕　笑鬼
座布團の枕が覺めるすそさばき　登美坊

第四回關西土地句會（大阪）

五月十四日　廣瀬無鬼報

インク、涼み、助手　山雨樓選

ホネムーン半ばに萬年筆が涸れ　無鬼
代筆のインクをつけて聞き直し　同
指先のインクなまめくタイピスト　素月
言ひわけにある重役のインク壺　同
造詣の深さを見せる赤インク　鐘生
入念にインク落して逢ひに行き　同
店閉めてからの涼みの將棋盤　無鬼
納涼のドライブに逢ふ橋の上　同
夕涼み嘘の混つた話し振り　素月
船の香へ去年の涼み思ひ出し　同
ぞめかれるための娘の夕涼み　同
こつてりと塗つて娘の夕涼み　鐘生
涼み舟ヤアーイオーイと摺れ違ひ　同
提灯が涼しき見せる屋形船　同
助手と云ふ心易さに欠伸が出　無鬼
女客マルキへ助手を走らせる　同
女房の助手で魚屋よく稼ぎ　素月
カフエーで助手助手らしい口をきゝ　同
一喝に慣れた頭を助手は下げ　鐘生
助手の番患者不服な顔で立ち　同

川柳雜誌社　天王寺支部句會（大阪）

須崎豆秋報

題人絹　互選

人絹へ故郷の山が近くなり　豆秋
人絹を着て大股のアスファルト　海洋人
人絹にチト應接の灯が明し　鶴峯
人絹の羽織がずれた色男　三汀
あさはかな虚榮人絹着てるなり　公二
春の日も人絹ゆえの憂き思ひ　柳民
大切にされつゝ人絹けなされる　柳村
悲しくも人絹に似た戀なりし　同
人絹の帶撚れ〳〵に春はゆき　敏坊
人絹のショールいぢり乍ら逢ひ　裸人
人絹をくさし支那人斷わられ　同
手を一つ打つて人絹又下り　同

新誌友

（六年五月廿二日まで）

「川柳雜誌」前金半年分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には、川柳雜誌の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（綠雨）

横田方眠、天野卜居、姫田夕鐘、藤原鳴玉、都藤冷笑（梅田支部）八田鐘生、長沖重治、大橋龜雄（廣瀬無鬼）藤田道太郎、石崎千仭（長崎柳秀）駒田白帝子、北川知己、福島葉伯、前田公克、藤田馨、平岩士郎、淺田一、三井伊三吉、山鬼石、佐々木三福、向井不路子、越中今雨、内村樹光、松原三夫、水原定次郎、田中英雄、鈴木志洋、服部英二、釜本柳村、（以上事務所）

編輯の窓

琴人・町二・山雨樓

▼忙がしいとか暇が無いとか云ふが、編輯子程年中追ひ倒されてゐれば、そんな事をいふ暇さへない。「櫻は櫻僕は君君」なんだ。

▼六月號も原稿の整理に沒頭して居る内梅雨季が近づいて來たが時間的にも、空間的にも、退けを取らぬ我社の勇躍は、新裝の六月號を出しました。打水のすが〳〵しい軒先に腰かけて、新川柳を味ふには、もつて來いです。

▼本社客員川村花菱氏が來阪、五月二日の社の句會に出席され武玉川と柳樽の人間味に就て講演され、當夜出席の諸君に古川柳の眞髓を傳へ、稗益一〇〇%といふ噂に、係の者もよろこんでゐる。

▼本社の例會は近來非常に盛大となり、出席者の激增を見る。句會が單なる句會で終る事なく常に出席者を稗益する處が多分にあるからだと思ふ。句會係は句會をより一層効果的にするやうに努力すると云つてゐる。

▼路郎先生が不朽洞より、諸君へ呼びかけてゐられる樣に、編輯上の組織を變へた。改革の主眼は讀者の優遇にあり、作句向上を意圖してゐる、未だ發表されぬ、多くの計劃がある、これら內部的の苦痛は忍んでも讀者諸君の爲めに、川柳向上の爲めに、我社は思ひ切つた革新を試みんとするものである、幸に主幹の意のある處を諒とし益々御聲援を給はらん事を。

▼主幹は病痾と激務と戰ひながら、絕へず川柳のために盡瘁されてゐる。それだけでも非常な努力である。然るに机上山なすの來狀は、手の下しやうもない有樣、それが整理に主幹をして呆然たらしめる事が度々である。中には、たゞさへ繁忙なる主幹を苦しめるだけのものさへ見える。だが主幹は一々叮嚀に返書を出してゐられる。併し如上の有樣ゆへ返書は自然に遲れて折角の主幹のさうした整理の苦痛も努力も認められぬ事が度々ある樣だ。これは其實狀を知らぬからであるが、向後は發信者に於ても充分其邊を考慮して頂きたいと思ふ。（琴人）

▼綠之助さんが結婚した。愛の問題についても眞劍に苦しんできた君だつた。新生活の多幸ならんことを。新聞を二つに分ける朝々や」

▼私が實社會への、そして亦川柳への最初の四年間を過した松江が大火に見舞はれた。柳友諸君の無事を祈つてゐます。

▼長野吉高氏の「柳の絮」回を重ねて好評嘖々。誌友諸君から本社宛讃辭が舞込んで編輯局をよろこばしてゐる。

▼閑生氏が久し振に氏獨特の筆を執つて下さつた。近頃の好文字である。御味讀を賜りたい。

▼五月三日の大朝紙は、新帝大を築く人々と題して「お弟子におんぶ——ヅブ穴が川柳を捻る——人情博士——長崎仙太郎敎授」なる見出しの下に我が柳秀博士の風貌の一端を傳へてくれた。味もそつけもない傑い人々

の多い中に、斷然先生は嬉しい存在である。「町二」

▼今春綠雨氏が湊町勤務に成られたので僕の勤めてゐる事務所とは電車線を距てゝ百米弱の近さ、お互ひに硝子窓から隔日顔が見られる。僕話がしたくなるとのこ〳〵二階から降りて行つては雜談數刻、まるで戀人にでも逢ふやうな樂みだ。

▼川柳熱の旺盛な新人が結婚をすると川柳への愛は容赦なく奪はれる場合が多いとの噂、關西土地の無鬼君も今回伉儷を迎へられたので御多分に漏れずかと心配してゐたら綠雨氏手を振つて「奥さんも川柳家だつせ」

▼十四日の編輯日に主幹のお越しが遲いので琴人、素人、杏三の面々氣の早い愚陀に釣られて腰をあげる。來たばつかしの山雨樓暫く雜談でもと留めたが、とう〳〵引止め得なかつた。それからものゝ三分も經たぬうちにひよつこり主幹が御座つた綠雨、鶴峰それとばつかり追手に向ひ首尾よく生取つて來る。

▼昔の諺に「苦は樂の種」とあるが一九三〇年には「苦中樂」の妙諦が叫ばれた。これは雜誌の編輯校正をやるものに蓋し一番よく体得出來るであらう。

▼川柳を作つて雜誌へ投句するそして發表された收獲を唯一の樂みとして待つやうなのは苦は樂の種式であつて、時とすれば苦は悲觀の種になつたりする。三一年の作家は少くとも苦中樂の妙諦に觸れるエキスパートたることを目標として精進したいものだと思ふ。

▼本誌前號で山陰の綠之助氏が「川柳に對する疑惑」と題しその切實なる惱みを披攊せられたのに對して町二氏が早くも明快なる健筆を奮つてゐる。地方川柳家と誌上で相見えることはお互ひに嬉しいことだ。

▼僕のところの野球チームが今回鐵道局管内の大會に出場したので連日三日間應援に行つた是非共優勝させたい氣持で一ぱいだつた。ところがさて實戰に臨んでフアインプレーに接したときには敵味方に拘はらず野球そのものをエンヂヨイしてゐた。どの雜誌のどの川柳家にもいゝ句に對する鑑賞的良心は亦そんなものではあるまいか。

▼「火華」欄の反響に付ては相當善意な忠告も舞ひ込んで來てゐますが、元々あの欄は云ひたいことを云はせる欄であつてその執筆者は社内外を問はないのであります(勿論取捨はする)從つてこれまで色んな人が書いてゐるのであつて決して特定の者には限られてはおりません。この點は誤解を抱かないやうに願ひますと共に奮つて投稿を歡迎します。本月は編輯の都合で割愛することに致しました。

▼「初心者歡迎」に付て奇可愛氏から御忠告を受けましたがこのことに付ては常に心を碎き意を用ひてゐるところでありまして次から次へと多くの新人を迎えてゐる現狀は多少わが社の微力が酬ひられたのではあるまいかと心ひそかに自負してゐる次第であります。しかし至らぬ點氣付かぬ事項も多々あらうと存じますから今後一層この點に留意しまして益々改善を計りたいと思ひます。

▼十八日の編輯日に主幹は、投句の認め方がぞんざいなものに限つて佳句に乏しい、と云つた意味の言葉を泌々洩されました字の上手な事も勿論いゝことですが兎に角叮嚀に書くことは總ての場合禮儀であり且つ有利であります。(山雨樓)

懸賞「川柳募集」

題「妻」六月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙　官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)

▼賞品　秀逸數句に薄謝を呈す

▼投吟　大阪市西成區千本通五丁目七

麻生路郎氏宛

大阪市住吉區住吉町

化粧新聞社

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第八卷第八號課題

六月五日締切

（各題十句以內）

▼埃　蛭子省二選

▼飛石　橋本綠雨選

▼都會　增位江柳共選　山本雨迷共選

第八卷第九號課題

七月五日締切

（各題十句以內）

▼近作柳樽　安井ひろし選

▼迷信　長崎柳秀選

▼緊縮　關本雅幽　中島鐵洲共選

每號募集

▼第一線　麻生路郎選

▼光耀抄　麻生葭乃選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、聘謝廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも屆ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號より御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和六年五月廿五日印刷

昭和六年六月一日發行　（每月一回一日發行）

第八卷第六號

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社　振替大阪三一五一四番　電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社　振替大阪七五〇五〇番　電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戶）米田、後藤、寶文館（顧館）

石榑（京都）三宅　（松山）弘文舍　（石川縣）マコトヤ

創作奨勵 懸賞川柳

第三回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるため、本社は茲に創作奨勵の名に於て弘く社會より、より良き作家の、より良き作品の募集したところが前號發表の如く多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第二回を募集することにした。奮つて應募せられんことを切望する。

課題　「顔」

選者　橋本綠雨

賞
一等　金五圓　一名
二等　目覺時計　二名
三等　川柳雜誌（壹年分）　三名
佳作　若干名　記念品贈呈

句數　「一枚五句以内（但一人にて幾枚投するも可）」

用紙　「川柳雜誌」六月號より每號刷込みの投句用紙に限る

締切　昭和六年八月五日限

發表　昭和六年九月號（九月一日發行）誌上

投句所　大阪市住吉區杭全町六〇三　川柳雜誌社内　創作奨勵懸賞川柳係宛

（切取線）

（切取線）

（句數五句以内）

川柳雜誌（第三回）懸賞川柳投句用紙

住所

氏名

（規定違反は沒）

本社基金醵金者御芳名

醵金を拜受しました方々の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。（受附順）

金　拾　圓也　川村　花菱殿
金　壹　圓也　向井不路子殿
金　拾　圓也　阿部　閑生殿
金　五　圓也　今井　菊路殿
金參圓六拾錢也　丸島　利生殿
金壹圓五拾錢也　加藤あざみ殿
小計　金參拾壹圓拾錢也
累計　金百參拾六圓九拾錢也

社告

本社基金募集

【川柳雜誌】が柳壇の力強い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孜々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旆を掲げつゝ力一ぱいに奮闘して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に賛同され、直接間接多大なる御聲援と御助勢を頂きました皆樣御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら〳〵過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますときに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあることは云ひましても物質上に悉まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧けることは容易ならぬことゝ存じますぐうしても川柳に熱を持たれ

【川柳雜誌】を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことゝ致しました。何卒本社の微意のあるところを諒とせられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所内、基金募集係宛になるべく振替（大阪七五〇五〇）が爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に錄し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、眞ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二一番

川柳雜誌 **廣告欄**

御送金は一切無料

振替用紙で御送金の場合には郵便局に拂ひ込む手數料を本社で負擔します

「川柳雜誌」は愛讀者のものです。此の信念のもとに創刊以來働いてきた本社は、今度思ひ切つて右のことを斷行いたします。振替は僅かの費用で確實に送金と通信とができますけれども、僅かなりとも其の手數料を御送金者が負擔せばなりませぬ。それを今後は一切本社で負擔いたし所要の御送金高だけお拂込みになれば、他には一厘も負擔されずともよろしいやうにいたしました。たとひ僅かの奉仕の務めではありませうが、どうぞ本社の微衷をお汲みとりくださつて、せい〳〵御利用くださるやうにお願ひ申します。

綠雨居小集會

六月五日午後七時より

兼題「田植」

會費　不要

久し振りに寬いだ小集句會を開きます。別に案內狀は出しませぬから御遠慮なくお越し下さい。（綠雨）

場所は住吉區杭全町六〇三　市バス平野線クマタ停留所（下車東南約四丁）

社告

本社の例會案內希望の方は左記へお知らせをお願ひします。

大阪市天王寺區北河堀町三

會報係　福田鶴峰宛

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさはしい簡素な裝幀に出來ました

第一卷　第二卷　各金五圓也

第三卷　第四卷　各金參圓也

第六卷　第七卷　各金參圓也

當分第五卷に限り

特價（冒水）**金壹圓五拾錢**

各送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい

第二號より第四十七號まで　各一部　金拾錢

第四十八號より第八十三號迄　各一部　金貳拾錢

（但し一號九號十二號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所

藤本卯之助編

新聞雜誌 **印刷便覽**

附新聞紙法及記事關係法規諸屆樣式、　金五拾錢

大阪市東區農人橋二丁目

發行所　藤本兄弟印刷所

振替大阪八二八四番

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

贊助員

池澤樂居
大道弘雄
岡本一平
片岡直方
嘉納純
田中辰二
長崎柳秀
國枝史郎
藤村作
藤本卯之助
赤井清司
淺田一
末弘嚴太郎

客員

伊藤彦造
大島濤明
岡田三面子
川上三太郎
川村花菱
米村あん馬
吉岡鳥平
吉田清
田村孝之介
窪田銀波樓
安川久流美
前田雀郎
前田五健
柴谷柴舟
篠原春雨
蛭子省二
森東魚
相元紋太

社友

茨木奈緒美
伊藤緑之助
生田翠夢
池田雪峰
石川双葉子
西田艸樂
西村明珠
友淵貴山
川村觀月
片桐靈靈
立井登美坊
辻左馬
永田里十九
中川めかく子
長山元水
中野柳陽
中野裸人
中澤濁水
中見光路
村松夢狸
上野錦水
岡崎桂枝
桑原京郎
松田多郎
山本雨迷
山本丹路
増位汀柳
藤岡櫻果
福田鶴峰
柳川洲馬
楊井二南
越田久水
淺井冷々子
阿形一杉
阿部閑生
櫻井圓角
北山倍郎
喜多春秋
木村晃卓
水田光穗
三輪夏曉
三好計加
白井梅里
平井蒼太
日野華水
須崎豆秋
杉谷事路

同人

岩本素人
岩崎柳路
伊藤愚陀
長谷川一徹
太田朝陽
龜井花童子
高橋かほる
竹内多聞
中島鐵洲
藤里好古
酒井駒人
朝田新水
關本雅幽
水谷鮎美
庄萬よし

編輯局（同人）

橋本緑雨
安井ひろし
松丘町二
松盛琴人
福田山雨樓
出口雨町
安西杏三
麻生葭乃
住田亂耽

主幹

麻生路郎

道頓堀支部（大阪市）幹事 庄 万よし
天滿支部（大阪市）幹事 北山悟郎
濱寺支部（大阪府）幹事 太田朝陽
神戸支部（神戸市）幹事 日野華水
山口支部（山口縣）幹事 柳川洲馬
函館支部（函館市）幹事 龜井花童子
高知支部（高知市）幹事 中澤濁水
梅田支部（大阪市）幹事 川村觀月
螢ヶ池支部（大阪府）幹事 茨木奈緒美
金澤支部（金澤市）幹事 中川めかく子
田邊支部（和歌山）幹事 辻 左馬
簸川支部（島根縣）幹事 伊藤緑之助
豊橋支部（愛知縣）幹事 白井梅里
平塚支部（神奈川）幹事 酒井駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事 水田光穗
京都支部（京都市）幹事 桑原京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事 中島鐵洲
別府支部（別府市）幹事 木村晃卓
堺支部（堺市）幹事 友淵貴山
松山支部（松山市）幹事 淺井冷々子
守口支部（大阪府）幹事 朝田新水
御旅支部（大阪市）幹事 櫻井圓角
高岡支部（富山縣）幹事 越田久水
天王寺支部（大阪市）幹事 須崎豆秋
平野支部（大阪市）幹事 藤岡櫻果
鶴町支部（大阪市）幹事 關本雅幽
小松支部（石川縣）幹事 上野錦水
高知第二支部（高知縣） 長山元水
御池橋支部（大阪市）幹事 村松夢狸

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が緣とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘 嘉納合名會社醸

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和六年五月廿五日印刷納本　昭和六年六月一日發行

川柳雜誌

（第八十九號）

定價金三拾錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

輝く美髪

今直に御愛用下さいませ

全國有名化粧品藥店にあり

伊豆椿香油本舖